

「内田祥三談話速記録」(一)

聞き手・村松貞次郎

〔前書き〕

ここに紹介するのは、昭和四十三年二月十七日から十一月一日にかけて、全十六回にわたって行われた内田祥三の談話の書き起こしである。内田祥三は、大正から昭和にかけて東京帝国大学教授を務め、建築・都市行政において大きな影響力を持った人である。また建築家としても多くの作品を残し、東京大学内では関東大震災以後のキャンパス復興の責任者であった。後に第十四代総長を務め、戦時下の困難な時期に大学行政の任にあたった。

『内田祥三先生作品集』(非売品、昭和四十四年十一月三十日発行、内田祥三先生眉寿祝賀記念作品集刊行会編集、鹿島研究所出版会発行)の「あとがき」によれば、出版部会は、「四十三年の一月から数十回先生の自宅にて委員が長時間に亘り」打ち合せをした、という。従って、談話はその打ち合せの一部ということになる。実際、作品集を読むと、談話と同じ文章、内容が少なからず含まれていて、談話が作品集を編纂するために企画されたことが判る。聞き手は故村松貞次郎(東京大学名誉教授(当時)、生産技術研究所助教授)

である。

底本は、大学史料室所蔵の「内田祥三先生談話」と題されたファイルを用いた。鉛筆書きのものをゼロックスコピーして綴じたものである。

今回は座談の第一回(昭和四十三年二月十七日)、第二回(同二月二十日)を収録する。

凡例

1. 原文は、談話の録音テープから書き起こされたものであり、誤字・脱字などが散見されるので、最小限の訂正を加えた。句読点も最小限の訂正を加えた。
2. 人名は、判明する限りにおいて氏名を調べ、()で補ったが、不明のものは仮名のままにしておいた。建築名も、原名称、建設年を()で補った。また書き起こしのなかの?マークも、そのままのこし、(?)マークで示した。

■内田祥三 略年譜（主として「内田祥三先生作品集」による）

明治十八年二月二十三日 東京深川にて出生、父安兵衛、母せん

の長男

々 三十四年三月二十八日 東京府開成中学校卒業

々 三十四年七月 第一高等学校大学予備科第二部入学

々 三十七年七月五日 同 卒業

々 三十七年七月五日 東京帝国大学工科大学建築学科入学

々 四十年七月十一日 同 卒業

々 四十年八月一日 三菱合資会社本社技士

々 四十三年四月十三日 三菱合資会社を退社

々 四十三年六月十七日 東京帝国大学工科大学大学院入学

々 四十四年二月十五日 東京帝国大学工科大学講師嘱託

々 四十四年六月十五日 大学院退学

々 四十四年六月三十日 陸軍経理学校講師嘱託

々 四十四年十月五日 耐震構造調査嘱託（内閣）

大正五年十月五日 東京帝国大学助教

々 六年十月十九日 震災予防調査会臨時委員（内閣）

々 八年六月七日 工学部講堂並教室及実験室新築工事設計を嘱託

々 八年七月十五日 工学博士の学位受領「建築構造特に壁

体および床に関する研究」

々 九年三月二十二日 都市計画東京委員会委員（内閣）

々 九年七月十五日 震災予防調査会委員（内閣）

々 十年一月十二日 東京帝国大学教授

々 十一年四月十七日 平和記念東京博覧会審査官（農商務省）

々 十二年七月九日 東京帝国大学宮繕課長事務取扱

々 十三年六月五日 東京帝国大学衛生委員

々 十三年 月 日 同潤会理事

々 十四年十一月十四年 震災予防評議会評議員（内閣）

々 十五年一月二十日 地震研究所所員（文部省）

々 十五年六月十六日 学術研究会議会員（内閣）

昭和十年 日本建築学会会長

昭和十一年三月七日 都市計画東京地方委員会委員（内務省）

々 十二年十月二十五日 東京府防空委員会委員（内務省）

々 十三年四月一日 東京帝国大学評議員

々 十三年八月三十日 昭和十三年度文部省視学委員（文部省）

々 十四年 日本建築学会会長

々 十四年六月十日 学術研究会議会員（内閣）

々 十四年九月二十一日 工業品規格統一調査会委員（内閣）

々 十五年一月十八日 東京帝国大学工学部付属総合試験所管

理委員

々 十五年六月二十八日 住宅対策委員会委員（内閣）

々 十五年九月十七日 用材統制委員会臨時委員（農林省）

々 十五年十二月四日 都市計画東京地方委員会委員（内務省）

々 十六年二月一日 東京帝国大学警防団企画研究会委員長

々 十六年二月二十五日 東京帝国大学第二工学部設立準備委員

会委員

々 十六年四月一日 東京帝国大学工学部長

々 十六年四月二十六日 東京帝国大学第二工学部人事調査委員

会副会長

々 十六年六月十七日 (財) 理化学研究所所評議員

々 十六年七月一日 東京帝国大学報国隊工学部隊長

々 十七年十二月二十八日 科学技術審査会委員 (内閣)

々 十八年三月十日 東京帝国大学総長

々 二十年十二月十四日 依願により退職

々 二十一年五月二日 勲一等瑞宝章

々 二十五年 日本火災学会設立、会長

々 二十六年四月一日 東京大学名誉教授

々 二十六年 日本都市計画学会会長

々 三十二年 日本学士院会員

々 三十三年 建築基準法改正調査委員会会長

々 四十七年十一月三日 文化勲章を授かる

々 四十七年十二月十四日 死亡

○第一回 (昭和四十三年二月十七日)

村松 きょう昭和四十三年二月十七日内田先生のお話を伺う会の第一回、これから始めさせていただきます。きょうは一応建築をやられたようなところから、建築に入ってこられたそこらあたりから

気軽に、あんまりフォーマルでなくて結構ですから...

内田 まず一番最初は生年月日ですが、ぼくは明治十八年の二月二十三日生れなんです。それでぼくの親父というのは小僧から仕上げた最後は米屋の番頭みたいな、ですからむしろ平民なんです。母はその当時の士族の出でして、それでぼくの親父というのは二十二年に死にまして、ですからぼくは顔もよく覚えてないくらいなんです。

村松 満四才ですね。

内田 そうです。それでぼくは母の手一つでもって育ったのですが、ぼくの母はさっきいきましたように士族なんだけれども、親父がそういう商人だものだからぼくも商人にしようと考えていたんですね。それで始終いつていたことなもんだからうる覚えにも覚えてるわけですけども、小学校を全部やって、小学校を卒業したらば小僧になって、横浜にどこか外国貿易夫をするようなのでしつかりしたところを捜して、そこへ奉公に行つて、小僧さんに行つて、そしてだんだんと...

村松 それでお父さんも、お母さんも東京の方でございますか。

内田 そうです、東京です。

村松 生粋の江戸っ子になるわけですね。

内田 そうですね。ぼくらやっぱり平民なものだから家系なんていうものは確実なものというのはいんですけれども、ただお墓に、お寺に埋めた書類の写しみたいなものがありまして、それで見るとぼくで七代、東京の深川ですね。だから江戸っ子という分にはまっ

たぐの。それからぼくの母のほうはそういうふうに詳しくはわかりませんが、やはり相当古いと思うんですが、母の親父というのがこれは貧弱だけでも旗本の家から分家して、それで住んでいたのは、ぼくらがよく知っているのはぼくらの生まれる時分から麻布に住んでいまして、だからこれはやっぱり分古くから江戸っ子なんだろうと思いますけどね。

村松 そうですね。三代住めば江戸っ子といえますから、七代だつたらもう……。お話の腰を折ったようですけど、それで結局横浜の貿易商の小僧さんということは実現しなかつたわけですね。

内田 しなかつたんです。けどもやっぱり武士の家に生まれたからかも知れないけども、漢学ですね、ああいうものを非常によく教え込もうとして、ぼくはまだ非常に小さい時分ですね。でも五つぐらいの時分からでしょうか、昔の四書というのがありますね、大学、中庸、論語、孟子と、これを夜になるとよくに教えてくれたんです。それで自分が少しわからないところがあるというと、里の麻布にゆきまして、そこで親父に教わって帰って、それをよくに教えてくれるというふうなふうで、非常に学問をしなくちゃならないということはよく知っていたのだけれども、ただ商人になるには始めから商売を体験的に覚えなくちゃいかんというふうな考えを持っていたらいいですね。それでそういうふうな関係でぼくは非常に早く学校へ入りまして、普通の学校にはちよつと入れないで私立小学校、その時分には非常に珍しいんですけども、東洋学校というんだと思いますけど、そこへ入りまして、それで二年くらいやって、そう

してやっぱり市立の小学校へ入らなくちゃいけないというので市立の小学校へ連れてゆかれたんですけど、その当時は隅田川の向こう側、つまり本所と深川ですね。その当時の本所と深川二区で小学校が二つしかない。それで一つは深川小学校という、これは深川区にはあるんだけどむしろ本所区に近いほうで、本所方面の人が多く行った学校で、ぼくが行ったのは深川の八幡様（富岡八幡宮）のじき脇のところ、明治尋常高等小学校といつてそこへ入つたわけなんです、その入るのにやはり母がいろいろ研究したんだろうと思うんですが、一年や、二年は習わないでもわかるようになっていって談判した。そんなこといつたつてそう年もまだ小さいんだしそういうわけにはいかなかった、ともかく試験をしてみるからそれによつてこちらでも考えようということになつたらいいですね。

それで試験にゆくんだというんで母に連れられて行つたんですよ、そうしたら作文が出ましてね、それが非常に緊張していたんだろうと思うんですが、その標題を覚えていますが、藤見に人を誘う文というのをそういう題で、それでそれを出したところが年の割合にはそうそうにやるから、じゃ二年に入れてやろうということ、その市立小学校の二年に入れてもらつたんです。その時分は非常に何かすべが自由で、ほんやりしてのんきになつていた時で、いろんなことが学校でも勝手にできた時代でして、それで二年を終えましたらほくだけでなく、ぼくを含めて三人だつたと思えますが少しあとに残されて、みんな免状をもらつて帰つちやつた

あとで、割合によくできたから三年はやらないで四年にしてやるというんです。(笑)

村松 のんきなものですね。

内田 それでやっぱり小さくてもうれしかったから非常に喜んで、その時にいろいろ注意を受けました。四年の値打ちがあるから四年になったんだなどと思わないで一生懸命勉強して、成績が少しでも悪ければ落とすからと、一度上げてまた一年下に落とすからというような話などもしてくれて、それでずっとやって行っただんですが、その時分には本所、深川には中学校なんてものはありませんで…。

—先生それはおいくつだったでしょうか、四年生になられたという時は。市立の小学校へお入りになって、試験を受けて二年になられて、一年でもう四年になられたという時のお年は。

村松 だからせいぜい十才になっておられないでしょ。

—普通の三年ぐらい…。

—学力はいまの四年生どころじゃないでしょうね。

内田 その手紙を書かされて、いまでもそんな手紙は書けませぬね。

—もちろん先生漢文をお習いになっていきますから漢文調…。

内田 さあどうだか(笑) そこまでは覚えていないんですが、標題だけ覚えて…。それでだんだん進んで行って高等三年、これ尋常高等小学校でして高等科の三年になった時に、ぼくはむろん母からいわれてもう一年、尋常科四年、高等科四年という生徒ですからあ

れをやって、そして小学校尋常高等科を卒業して小僧にゆくということだったんですが、その高等科三年になった時にこれは余談だけでも、男女共学でして、その時分としてはむしろ珍しい場合でしたね。人数が少ないからなんです。大てい尋常科だけでやめてしまわうんですね深川あたりの人は。それだから高等科の三年、四年なんて人数が非常に少ないからそれで一緒だったんですが、その三年を終えて四年になるという一ヶ月ばかり前に、その当時のぼくらのクラス、いまでいえば主任だけでも、世話をやいてくれる先生が田中伴吉という先生でして、これはなかなか熱心な、その先生がぼくともう一人、二人また残されましたこの中学校へゆくんだというようなことから聞き始められて、いや中学校へはゆかないでもう一年でここ卒業したら小僧にゆくんだという話をしたら、それはどういう目的でどういうんだということをいろいろ詳しく聞いて、それでぼくら答えるだけのことは答えたんですけども、もう昔とは世の中が変わってきて、商売を覚えるのにも必ずしも小僧をやらなくては覚えられないというわけでもないし、むしろ学問の力でもってそっちのほうに行っただけのほうが非常に早くもゆくし、だけでもずっと前から母が非常に熱心にそういつているんだからといったら、そうしたらそれじゃぼくが行って君のお母さんに説明してあげてもいいと、そういうふうにいわれたんです。

それからぼく家へ帰ってその話をしたら、先生がそうまでいわれるんならそれじゃ中学校へ行ってもいいと、その代わり中学だけで、それから先はどこへもゆかないことにして、そして商売の道へ入る

ようにしたほうがいいということ、この時分で本所深川には中学というのではないんです。それでみな隅田川を越えて、大ていの方は私立で商工中学というのがあります、商売人が多いものだからみんなその学校へ行つたんです。それでぼくは田中先生にどの学校がいいんだと聞いたら、もしこの辺でゆくとすれば築地よりほかにはないというんで、その築地というのは現在はまだなんど変形して都立大学になっていきますけど、その大学になる前は都立第一中学ですか、というのであつて、深川からその学校へ行つた人というのはその当時、あとから聞いたんですけどぼくの家のじき近くの深川公園の中に田口というお医者さんがありまして、そこのお医者さんの息子さんが行つただけで、ほかに明治小学校から築地の中学なんかに行くものはなかつたんです。

それでこれはもうぼくが自分で十一ぐらいだったか願書をもらいに行つて、それで願書を書いて持つて行つたんですよ。そうしたら君は年が足りないから駄目だというんです。それでここには年齢に對するやかましい規定があつて、その年に達しない人は入れるわけにはゆかない、だからぼくはいろんなことをいつて粘つただけけれども、要領はやつぱり試験を受けて力がないから駄目だということならわかるけれども、そうでなくいきなり年が少し足りないからだから、少しといつても一つ足りないだけだったんですが、その時分ギリギリのところにくくと、だからわずかのことで入れないというのはひどい、ぜひ入れて下さいといつて非常に粘つたんです。でその粘り方があまり強かつたせいだろうと思つてますが、その受付にい

た先生です、ね、やつぱりそれがそんなにここへ入りたいというのならここは駄目だけれども、こと似たような学校が今年から二つできることになつてゐるから、そのうちのどつちかに入つて自分で一生懸命勉強したらいいだろうというんで、それでそれは耳寄りの話だと思つていろいろ聞いてみたんです。そしたら一つは共立中学というんで、それから一つは城北中学というんで、それでこの二つが東京市に足らないものだから、それを臨時に本式の市立の中学ができるまでの間、仮に市立の中学として取扱うと、今年からそういうことになつてゐるのだと、だからそこへ行つて頼んでみたら、そこならあるいは年の一つぐらいの違いは何とかがして入れてくれるかも知れないから。それでそれじゃそこへ行つてみますけれどもどつちがいいでしょうといつたら、それは共立が近いからそのほうが便利でいいだろうといつたので、行つて願書をもらつて、そして願書を出したんですが、それで出しても何ともいいませんから、それからむしろこちらで念を押して、年が少くないという話なんだがそれでいいんですかといつたことを聞いたら、いやいいというわけじゃないけどもかく願書だけを受取つてよく研究してみたら最後に決める、その決まるのはいついつかにこいといつたので、それで帰つてきて、そしてその時に行つてみたら、そうしたら予定の人員よりは人数が少し多いけど、数名だけで別にそう大して収容できないといふほどでもないんだから、ただ年が足りない人間が三人おるといふました。あとでその三人もわかつたんですが、三人おるとまあ正式にはいけないことになつてゐるんだけど、本来こはつ

い先ごろまでは自分の学校勝手にそういうことをやってもいいことになっていて、市の指図を受けることはなかったんだし、またこれから先も例え市立になっても市の指図を受けるといふ気持はないんだから、だからきたまえといふわけでそれで簡単に入れたんですが、その三人というのはほくのほかにまだ二人あったんですが、その二人ともなかなか偉くなりまして、一人はこれは小川君なんかご承知かも知れないが、大屋敦といつて住友系の、日本銀行の政策委員というんですか、何かありますねそれを。もう一人の人も帝室博物館長、もういまは年を取っているから辞めてのんきにやっていますか。

村松 何とおっしゃる方ですか。

内田 はつきりしていないから調べておきます。

松村 共立中学というのは場所はどこにございましたか。

内田 神田淡路町二丁目です。それでともかく中学に入れたから非常にうれしくて、ほく深川からそこまで毎日歩いて通いました。まあその当時は日本橋までゆくと、日本橋から浅草を通って上野まで馬車がありまして、馬車に乗ったけども、しかし大体を歩いて、そうしてこれは入った時は全然知らなかったんだけども太田長三郎という先生がおりまして…。

村松 中学の先生ですか。

内田 ええ、この先生が代数と三角を教える役になっていたわけなんです。その先生が偶然にほくの母が小さい時分の幼友だちなんです。ほくの母は伊藤という家なんだが、その伊藤という家が、い

まの先生は太田というんだけども、太田という家から分家したものだといふことをあとから聞いたんですが、ほくの名前をその先生が知っていました、君のお母さんはおせんさんというんじゃないんですかといつて聞かれて、そうですといつたら、よく知っているといふんで、それでいろいろ家にも遊びにきてくれたり何かして、自然その学校の話や何かが出たんで、ま、せっかくそうできないというんでもなし、普通にはやってゆけるんだから、中学を出たら高等学校へ入れて、大学へやるといふうな当り前の道を辿って行ったほうがかえって先は早いから、そういうふうにしたらいといふようなことをいろいろ母にいつたらしいんです。それから先は自ら中学を卒業したら上の学校へゆくんだといふような気分になったんです。

村松 失礼なことを伺いますけど、経済的にはいかがでございますか。

内田 それはほくの親父が亡くなる時に、つまり親父の遺産というものが深川の小松所、やはり同じ場所ですぐ近いところなんです、そこに長屋が一棟あったんです。その長屋が五個あったか、六個あったかはいまはつきりおぼえてないんですが、それが主としてほくの学費のようなものになったんで、なおしかしそれだけでは家にはほくの亡くなった父の母と、父の妹と二人おりましたし、いろいろなことをして、いまでいえば内職でしょうけども稼いで、そしてそれを補給したんです。ただ始終いわれたことは、ともかく親父の残して行った家賃で米だけは食べてゆけるんだから、そういうこ

とについての心配だけはしなくてもいいということをよく聞かされていきましたが、それがあつたためにぼくは、のちに話しますけども、三菱へ入って三菱にひどく止められたにもかかわらずそれを振り切つて退めて、それは俸給に離れてもどうか、こうにか食つてだけはゆけるということがあつたものだから、それは非常に幸せだった。

村松 進学のところのお話ですね。あの太田先生が大変お母さんに勧めてくれたと、そこらあたりからあれですか、でそれは高等学校へゆかれるのはそろそろ話が進んだわけですか。

内田 別段母からは上の学校へ行つていいという話も聞かず、まあ自然と卒業した場合に願書を一高に出しにゆくということについてはあまり苦情もありませんでしたし、自然納得していったんだろうかと思うんですがね。しかしその初めの田中伴吉先生が中学へゆけといわれたからだから中学へゆかしてくれとぼくがいった時には最初は相当反対の意見が強かつたんですよ。

それから一高の試験、これは共立中学というんだつたけれども、市立になつてから開成中学と名前を変えまして、ぼくの入つたのは開成中学、それで五年間だけ市立として残つていたけども、五年経つて市立はやめて元の私立に返つた。その時にやはり名前はやはり開成と変えたのでそのままあとへ引継いだんですが、城北中学のほうはその時から市立になり、そしてずっと官立になつたわけですよ。一高もずいぶん競争率はあれで、高等学校がぼくらが試験を受けた時には東京、京都、仙台、熊本、それから（テープ替）

一の高組、二の高組、三の高組と三つのクラスに分かれていて、一クラ

スが三十四、五人でしたが、ぼくは三の高組の十八番というんだから、入つたのが真ん中よりちよつと下のところでしたね。

——— ずっと上から行つてそれで組分けした……。

内田 それがどう分けたのかそこはよく知りませんが、多分そうだろうと思うんですが、あとになつていろいろ割り振り方で三の高組は理科だというようなことをいう人が出てきたりして……。

——— その当時は医学専門だとか、工科専門、理科、そういうことを……。

内田 一部、二部、三部とあつて、一部は法文、経済はないんだから、二部が工科、理科、農科、それから三部が医学、それから高等学校も大体深川から通つたんですよ。ほう菌の下駄を履いてゆくと、一日履くと楊枝を噛んだようになつちゃう、それを何日でも短くなるまで履いたわけです。

——— 一時間以上は歩いたわけですね。

村松 本郷ですね。

内田 淡路町よりはずつと遠いですよ。ずいぶん掛かりました。それで風邪をひいたようだとか、腹が痛いとか何とかそういう時だけは永代橋のところまで歩いてきますと、永代橋のところから一銭蒸気というのがあるのです。一区域一銭なんです。それが永代橋から吾妻橋まで通つていります。それに乗つて厩橋までゆきまして、厩橋から円太郎馬車に乗るんです。レールのないやつ、それが須田町を通つてゆくんです。それで須田町まで行つてそこから歩くか、あるいは一高から裏を通つて、上野のほうを通つてそして厩橋まで

歩いちゃって、厩橋から永代橋まで乗ってというような、そんなふう……。

村松 昔の人はよく歩いたんですね。

内田 そうです。だからお茶の水からバスが大学のほうにゆくようになって非常に繁盛するんですね。みんな乗るから。その時は実に不思議なような感じがしましたけどね。いまはとても歩く気もしないし、あれだけでも……。

——われわれも歩きましたよ。みなお茶の水から歩いたもんです。

内田 そうですよ。お茶の水から何かへ乗るなんてことはほとんどなかった。

——円タクとか何かというのができてからみな五厘ぐらいになった。ほとんどみな歩いておりましたね。それから先生ずっと丈夫なんです。夫なんですね、(?)に行っておられるから。

内田 もう非常に僕は姿勢が悪くて、よく母にいわれたんです。お前は五十にもなるといって土をなめて歩くようになる。そうもならないけど、しかし姿勢は非常に悪いですけど案外丈夫に……。

松村 いやいよ一高時代に入ったわけですけども、一高時代のお話を少し、そこから具体的な作品も出てまいりますけども。

内田 ほくはそんなふうな経過で一高に入ったんですけども、またそういう経過で入った関係もあっても知れないけれども、建築をやるんなら絵を習わなくても自分で少し勉強するぐらいのことはやっているべきはずなんです。建築をやるうというんなら。それをちつともやっていかなかったんですね。絵を書くということは、つまり

小学校で図画のことをやっているというだけで。まだ高等学校へ入ってもそういうふうなことはちつとも気が付かないで、高等学校と大学はすぐそばなんだけど、それでも一向大学の中へも行ったこともないし、無関心というわけでもないけども、行ってみようという気持ちも出なかったんです。

そのほかで一年から製図というのがありますが、その製図の先生が小島憲之先生で、これはその当時はちつとも知らなかったんですけど、卒業する時分になってほくが建築に志願するということになって、その小島先生が恐らく日本で東洋建築を大学で教えた一番古い先生だということがわかってきたんですけども、その小島先生というのはまたやっぱり普通の場合とは非常に違う先生で、ほくの書いたドローイングをご覧になったかと思うが、むやみに念を入れて何のためにこんなものを書かせるんだらうという不満の声などもずい分あったんだが、それに対して小島先生は、製図をやるというのは悪いものはいくらでも直すという忍耐力を養うというのが非常に大きな目的だから、そのつもりでもって少しうるさくても一生懸命やりなさいといわれたんですが、実際はほとんど実用には適しないような面倒な図面を書かせられたんですが、だけどやってみればできないことはないんで、同じクラスの中でもその製図の点はほくはいいほうであったように思っています。それに時々しくじってけしが出るというところのけしをもらいにくる友だちがいたんだから。それでもとかく大学へ入って、そしたら大学の廊下に卒業計画がずつと貼付けて陳列してありまして、それは一体何だらう

ということ聞いてみると、これは卒業するにはみんなこういうものをやるんだという、今年の卒業生のがここに飾っているんだという話を聞いてびっくり仰天しちゃったわけです。こんなものを書くんではとても駄目だから、これは困ったところを志願したもんだという。

そのなぜ建築を志願したかということは少し抜けちゃったけど、それにはさつきちよっとお話しした太田長三郎という先生の考え方が大分入っているのです、その太田という先生は理科の物理か何かをやった人なんです、どうも中退したんじゃないかと思うんですけども、正規に卒業したんじゃないかも知れないと思いますけど……。

村松 中学校の先生ですね。その先生がかなり建築をやれということをおっしゃったわけですか。

内田 そうですね、それは特別にということではなく、ほくらより三年ぐらい下に久留という生徒がいたんです。これが久留中（あたる）、そのお父さんが久留正道さんで、それでどういうわけかよく知っていて、時々お互いに訪問しては話合おうというふうなことをやっていったようでした。そういうふうな関係で建築の話をよくしたんですね。でほくらも聞いたことがあって、何だかその話を聞いているだけだとおもしろそうでもあるからというふうなことで、ずい分のおんびりした話ですね。どういうことをやるのかということ、すぐ隣でやっているのを見にもゆかないで、それでいきなり試験を受けて入っちゃった。

村松 久留正道さんというのは上野の図書館（帝国図書館、現国際子ども図書館、明治三九）をやられたり、文部省関係の仕事をよくやられた方ですね。

内田 文部省の建築課長みたいなことをやっておられた。

村松 アメリカの万国博（シカゴ万国博覧会、明治二六年）の日本館なんかも設計されたりして、それと先生前に伺いましたけど、中学校の時でしたか隅田川を渡る橋の工事を何かおやりになったとかいうお話を、そのお話をちよっと……。

内田 興味を持ってね。

——土木をおやりだろうというふうな……。

内田 むしろそのほうに傾いていたんです。それを太田先生は土木にはあまり知っている人はいないけども、建築には知っている人がいていろんなことを聞けたりするからといって、それで勧められたんでして、その永代橋の架け替えではくいが非常に虫が食って細くなっていますからね、見えるところが。それでこんなんだつたら下のほうは大変だろうと思って毎日それを見て、ああいう工事を見ることは好きだったんですね昔から。そしてやがて抜いたらばまるで新しいようなくいが出てきたんで、それ非常に不思議に思っこの現場の世話役みたいな人に聞いたんです。そしたら木というものは水の中につかっているか、乾かしておけばいつまでも持つのだ、千年でも二千年でも持つのだという。しかし水と空気の間のようなところで濡れたり、乾いたり、濡れたり、乾いたりしているようなのはたちまち虫が付いてこんなふうになっちゃうんだと。虫は水の

表面のところ都合がいいもんだからということもあるかも知れないがという話だったんです。奇態なことがあるもんだ、不思議だと思つて学校へ行って友だちに話したり、何かしたことがありました。それが一つと、もう一つ何か永代橋でありました。その時に鉄の橋が建つようになって、そのトラスを見て非常に怪訝の感を持つたんですね。あれはこういうようなトラスで、それに筋交え型のものもあるし、バーチカルのものもあるしするけども、みなそれぞれ太さが違うということに一番ぼくは奇妙だという感じを持つたんですがね。それから、それもなぜああいうふうに形だの、太さだの違うもんだということを知ったら、そんな面倒くさいことを俺は知らない、監督さんにも聞いたらいいだろうといつてはね付けられちゃったんですけどね。(笑)

村松 現場の浅学には無理でしょうね。

内田 それもしかし熱心にどれが監督さんだといつて聞いて、聞きにいったんです。そしたら君はまだ中学生でこんなことはわからなくなつたつて、いまに勉強すればだんだんとかういうものがわかるようになるからという答えだったんです。多少やつぱりそういうものに興味を持っていたということは確か、自分では意識しなかつたですけどもね。

村松 構造の大先生になられた方で佐野利器先生でも、内田先生でもやはり土木をやるうとか、造船をやるうとか、どうもそういうことが多かつたんですね。しかしもう先生は初めから建築へ入られたわけでしょうが。

——先生一高では寮生活は……。

内田 寮生活は一年したんです。

——やつぱり一年、そういう規定があつたんでございませうね。

内田 一年はどうしても入らなくちゃいけないといつて、その一年に入つたのは実際ほくらいま考えてみても非常に幸せだと思つたのは、それがだんだん大人になつて大学を卒業して、みな法科、工科以下年限が違うからいつという時にならないんだが、みな無事にズーツと行つて、卒業して、卒業した時はその科の首席ですね、一部、二部、三部の首席を一つ部屋から出したんです。一部のほうは鳩山秀夫、これは一郎さんの弟ですね、よく二人が間違つてあれですけども、一郎という人のほうは非常に人間味のある立派な人格者で、そういうつも秀夫君が人格が悪いというわけでもないんだけれども、これは学問は途方も無くできる。二部は造船を作つてきた菱田唯蔵という、これはみんなでモンスターというあだ名を付けて、とても人間技でできるこつちやないという、その菱田唯蔵というのは土岐(達人か)君の奥さんのお父さんなんです。それから三部はこれは実に意外だったんだが、われわれとやはり同じ部屋に一年間いたんだけれども、宮路重嗣という、これはほくら高等学校で一緒におつて、非常に驚いたことは特別な暗記力を持つてゐるんですね。じきにいろんなことを覚えてしまつて、そしてなかなかそれを忘れない。でぼくは昔からむしろ暗記よりは推理のほうが間違いない、暗記はひよつと間違えるとまるで駄目になつちまうことがあるから、そういう意見だったんですが、その宮路の暗記力を見てから、

これは暗記力もばかにできない、あそこまでゆくと大したもんだなあというような気持を持つようになりましたが、高等学校時分にはやっぱり真ん中ごろでね、大してあれでもなかったんだが、やっぱり何か自分の好きなものを勉強していたんだろうと思うんですが、それで大学へ入って初めての試験で特待生になって、それからやっぱりそのままズーッと行って、卒業した時にはそのクラスの首席だったんです。

村松 三部ですと医学ですね。

内田 医学です。それで専門は細菌学をやりたいというんで緒方（正規）先生に付いて、そして細菌学をやったんです。でその当時われわれの卒業した時分に新潟に医科大学ができるというんで、その教授になる候補者を物色していたんだが、それを志願しまして新潟の教授になった。でその緒方先生が亡くなって、そしていろいろ教授にするのに、その当時は、いまでもそうかも知れないけど医学部は投票するんですね教授を、全国の医学者の中から、そして一番点数の多いものを推薦するというような。で宮路が当選して、そして緒方さんの後継ぎにくるはずで、その当時の医学部長は入澤（達吉）先生だったか、あるいは林（春雄）先生だったか、どっちだったかはつきりしなないですけど、二度ほどぜひこいといって手紙を出したけれども、自分には新潟の医大がこれでも動ききれないくらいに感じているのに、まして東大の教授なんていうのはもう望外のことだといってどうしても承知しない。

それでほくが親友だつてことを入澤先生も知っているし、林先生

も知っていたんです。それでどっちからだったか、時々東京へ出てくるようだから一つ勧めてみてくれないかといって頼まれてますね。それでほくが勧めたら、自分は新潟の医大でももつたいたくないと思っている、とても東大などへ行つて責任など果たすことができないから、ゆかないのが俺のためなんだから、君も一緒に断つてくれ、それでそういう返事をしてとうとう承諾しなかったんですけれども、そういう分変わった男なんだけど、それは高等学校時分の写真があります多分、いまお話ししたような人が写っている、捜しておきましょう。

村松 先生、高等学校ぐらいから相当お伸びになりましたか、もっと早いですか。

内田 ほくは伸びるといっても、人によって違うのかも知れないですけど、ほくは伸びるのに波があつたように思うんですがね。一高の一年の時に、いま丁度真ん中ごろに入つたという話をしたけど、三学期に腸チブスをわずらいまして、そして二ヶ月近く休みました。そしてもうしかし進級試験があるんだからゆかなくちゃいけないと思つて出て行つたんですよ、そしてたら友だち、友だちといつてもポートの選手で前に落第して二度目の試験を受けるべく勉強している。それが内田はいまごろ出てきて試験受けるつもりなのかというんです。でも試験がもうじき始まるから試験を受けるのにこなくちゃ駄目じゃないかといつたら、あんた試験受ければ及第すると思つているかといつて、中学や何かと違って一高でもって一学期の半分以上も休んでそして進級しようなどとはもつてのほかだといわれ

て、ほくはその数学の先生の数学が一番むずかしくみんな難関としていて、数藤斧三郎（たじょうのきさぶろう）という先生で、これは非常にいい先生だと思いましたが。その先生が非常に好きで、先生のいわれることは相当了解していたつもりだったんです。で試験受けたらそれでともかくパスしたんです。パスしたばかりでなく席順も少し上がったようだったんです。大して違いはないんだけど。あとから考えてみると何か友だちにいわれたのが刺激になってがんばる気持になったのかも知れないが、まあちょっとやればできるという自信を得たような気持です。

それから三年になりました時に、いま申しました菱田唯蔵君というのが一年からズーッといつも首席なんです。これは当然のことで誰も不思議がるものはなかったんですが、それが三年の一学期だと思っただんですが、その当時は成績の順位も発表するし、それからこれは全部であったかどうかかわからないがある程度まで点数も揭示したんです。その三年の一学期だったか、その試験の結果がほくが首席で菱田君が二番になった。これはほくは今まで間違えたんだと思っただけです。その時はほくは確かに間違いだと思うから、間違いに違いないから直してくれといったら、いやそうじゃないこういうふうになつていんだというから、いや帳面がどうなつていようとほくは菱田のような男より上にゆくとはどうしても想像できないんだから、何か間違いがあるんだらうからそれをよく調べてくれと、じゃあ調べておこうということだったんですが、やっぱり卒業の時にはむろん菱田君が首席で、ほくは二番だったんです。

これはやっぱり相当、だから高等学校へ入ってから大学に入るまでの間は少し波に乗った形があるんじゃないかと思いますが、だから一高の中でこれはちょっと非常に幸いであつたということは、三年になつた時に夏目金之助先生が帰ってこれまして、夏目先生は一高の外国語の首席教授なんですね。それで外国語のほうのあれは何というか、主任というのか、幹事というのか知らんけども、それだから帰ってこられたら自然と授業もされるわけで、ほくら三年の時に夏目先生から英語を習った。ずい分もつたない話ですが、それからドイツ語がそのあとで、京都の学部長何といったか、それもやはり三年の時に習った。松本文三郎先生だったかはつきりしませんが、あとでほくらが大学へゆくとじきに一高を辞めて、京都大学の教授になつて大成されたんです。夏目先生ほくらが卒業してまもなく朝日の客員が何かになられて……

村松 虞美人草か何かを書き始められたんですね。

内田 それから大学に入って、さつき絵ができなくちゃ駄目だというんで非常に驚いた。まあそれでもできるだけのことはやつてみようと思つて、そして普通にやつたんですが、その（？）は十一人いたと思うんだが、十一人の中の成績は悪いほうじゃなく、よかつたんですけど、一高でほくらと同じようにやつてきた先生たちは大学へきてたいい特待生になつた、ほくらも点数を見るととてもそんなところまでゆかない、どういふんだらうと思つてこの時もいろいろ聞きにゆきました。そして非常に驚いたことは科目にウエイトがある、それで自在画が三だつたかで、数学が一なんです。これは

もしも絵というものがそんなに建築に必要なものなら、これはやっぱり科目の選択を誤ったんだと、これは何とかしなくちゃならないって、土木に変わろうと思って、それでいろいろ変えることを研究したんですが、どうもやっぱり何か一度で伸ばすということに少し難点がありまして、自分でもいろいろ考えてみた。結局絵と建築のデザインとは性質が違うということを自分で発見したわけです。それが当たり前のことなんだけども、そういうことを考えるようになったんです。

ぼくはその当時は建築はデザインで、絵はデザインじゃないと思っていたんですね。これはやっぱりいまになって考えてみれば間違いで、やっぱり絵でもデザインの要素はある程度入っている。それで自己を表すデザインの入っていない絵は死んでいるというようなことをいわれますが、それは事実かも知れないが、ぼくは大学の一年の終わりの時分に考えたことはそうじゃなくて、やっぱり絵というものは自然を生かすということにあるんで、新たなものをいくらかやってみたって天然のようにうまくゆくものじゃないというふうに感じていたんです。ところが建築はそうじゃないんで、昔から誰か名家のやったものを真似ればこれはどうもつまらない建築になってしまふ、それでなしに自分である独創を生かして出してゆくようなものでなければ建築にはならない。そう考えてみるときれいな絵に書いた建築が必ずしもいいものじゃないということもあり得るし、絵はまずくともデザインは上手だということがあり得る。だからその方面を少し研究してみたらということであるいろいろ本を読んだり何

かしましたが、主として絵だの、彫刻などのことを読んだんだけども…。

村松 しかしつい分苦労されたわけですね。かなりまたそのころの東大の建築というのはやはり塚本（靖）先生とか、ああいうかなりポザールのなといいますが、芸術教育の非常に盛んな、一番盛んな時だったんじゃないかなったんでしょうか。

——外人教師がまだおられたんじゃないかなったですか。

内田 いやもう外人教師はいなかったです。

——じゃ辰野（金吾）先生…。

村松 塚本先生…。

内田 もう辰野先生もおられなかったです。ぼくが入った時には村松 伊東忠太先生、そういう非常にデザインの豪と、東大の建

築の歴史をいともこう造形、芸術教育の盛んだった時なんですよ。その中でやっぱりそれだけ考えられるのはずい分深刻に悩まれたと思いますね。

内田 佐野先生が一番若い先生でいろいろ世話をして下さったわけだが、ぼくは佐野先生にはあまり絵は上手でないと、先生盛んに自在画など書いておられるから、その考えを聞いてみたら、どうもぼくは絵がまずくて非常に損をすると、駄目だとは思わんけれども損することは確かだと思ふ。だから人のできることを俺にだけできなことはないんだから、勉強さえすればある程度までゆけるといふ確信を持っているからそれでやって、あんまり損をしない程度までやるつもりだと、ぼくはそれに非常に啓発されました。それで

どういふふうにしてやったらいいだろうかということとはあとと自分
で考えたり、本を読んだりしてあれしたんだが、結局結論はいいデ
ザインをできるだけ多く見るという、これが一番いい。それでどれ
がいいか、悪いかということはやっぱり自分でやってみなくちゃわ
からないんで、まず最初にはいろいろ種類の変わったものをよく見
て、そして何かそこから掴まえどころがあれば得るといふことがい
いんじゃないかという気がして、それでそのいろんなものを集めた
んです。それを土岐君が見て、ばかによくもまあこんなにていねい
にやったものだ……。

村松 この間も写真を、ほんとにその一部でしようけど拝見しま
した。やはりいろいろな傾向のものをお集めになったようですね。

内田 いろんなものを見て、それをやっているうちにどうもほく
はクラシックのような性質のものよりは、ゴシックとか、ロマネス
クというああいう性質のものの方が自由があつて、おもしろ味が
あるような気がして、それでそっちのほうに自然向いて行つたんで
す。けれどもいいものといふことはよくわからないからほくは懸賞
の入選の図案などをずい分面倒くさいものを一生懸命に写してみた
ことが相当あります。

村松 頑張り精神というふうなものですな。

内田 それでやっぱり三年に製図をやるようになって、二年が練
習時代で、あなた方の時分にもやっぱりそうでしたかね、ほくらの
時は二年という二週間に一つの題が出て、二週間に一課題、それを
二週間の間に仕上げて出す、そうすると次のがまた出ると、そうい

う時代でしたか。

村松 それから大学は逆のほうに今度は返りすぎちゃつたよう
ですね。そんなには絞られなかつたですね。

——大正末期から昭和に(？)、四週間だつたですね一つが。その
間に二週間に一つのもありましたか、それはまあ小さな題で……。

内田 そうそう小さな題でしたけどもね。あれはやっぱり非常に
ほくはよかつたと思う。数をどつさりこなしますから。それでまあ
三年になつた時はこの程度で満足するより仕方がないと、ある意味
においては自信も得たし、ある意味においてはあきらめもついで、
それで……。

村松 だけどそのあたりで先生がそう苦勞して考えられて、建築
と絵との違いとか、建築がいかにあるべきかとか、佐野先生や、先
生のお考えの変わり方というのが少なくとも東大の建築の教育のそ
の後といふのをずい分大きく方向付けたように思いますかね。

内田 佐野先生の影響が多いんですよ。ほくはその迷っている時
間が多かつたですからね。

村松 だけどそれからのちを拝見しますと先生のお力が多いし、
確かにあのままで東大の建築が行っていたら、またそれからあとの
鉄筋とか、鉄骨の時代を本格的に迎えてかなり混乱したんじゃない
かといふような感じがしますですね、結果論から見ますと。

内田 そうかも知れませぬね。

村松 例えばこれですね、作品の中で卒業設計なんていうのが今
度は計算しようといふようなことになっていきますけど、ああいう卒

業設計については何か先生思い出がございますか。テーマは何でございましてか。

内田 劇場です。あれは一口にいつていままでお話ししたいいろいろな資料を相当どっさり持っていますね、卒業計画をやる時分には。その資料をいろいろ方々の方面からにらみ合わせて、そしてこんなふうなものをごんごんな形のものにしようということを決めた。だから二年の時分に一生懸命に少しでもいいデザインを見る、それからドロイングにもできるだけ注意をすると、そういうものの成果の現れとでもいうのが一言のあれかも知れないですね。

だからこのオリジナリテイがどこにあるかというようなことなどからゆくと少し着想は弱いですね。でもあそれを済ませてからあとで自分の次のものを勝手にやるといような時代になって、つまり大学の建築などがはじめて、あれはやっぱりどうですかあなた方がご覧になって見ると相当これは内田がやったんだというような気持ちのあるところがありますかな。

村松 それはわかりますけど、しかし確かにあれですよ、学生の時のそういう先ほど伺ったような勉強のかなりの程度は総決算みたいなことはあるんじゃないですか。むしろいわゆるオリジナリテイというよりか学習の総括（テープ替）

内田 卒業論文と二つやるんですが、それが場合によっては卒業計画に直接くっ付いている論文であつてもいい。だからそれが工事報告みたいなものでもいいということだつたんですが、まるで別なものをやる。ぼくは卒業計画は、その時分芝居がぼくは非常に好

きだつたということが非常に影響をされているんだと思うんですがね。それで劇場のデザインをいろいろ研究して、研究といつたつて大したことはない、大学の学生の調べなんだけど、本を読んでみたりして、音響ということが劇場には非常に大事だということから音響のことを少し調べてみようというんで、建築の音響というようなことを論文にしました。劇場の音響のどんなことがどういふふうに影響するとか、そういうようなことを書いたものです。

村松 それは初めて伺いましたね。それからお弟子さんたちが、例えば大講堂とか、図書館なんかでずい分苦労された…。

内田 その音響のことはあとにもいろいろ、大講堂では非常に苦労した。これは大講堂のところでお話しようと思つて、で音響をいろいろやってみてなかなかこれはむずかしいものだと思つていた時に、早稲田の佐藤（武夫）君が市政調査会館（現日比谷公会堂、昭和四年）、あれを音響学的にいろいろやつて、ずい分いろいろなことを実験もし、研究された。そしてはくの見るところでは外国も全体を合わせてどうつていうことははっきりいえないけども、少なくとも日本の内地の状況と、それから外国のああいうもの状況などから見て、自分がこういう音響効果を与えるようなホールを作るにはどうしたらいいかということ、はくは佐藤君が初めてやつたんだと思うんですよ。それがやっぱり自分がいろいろ音響のことをやっていたもんだからそういうことを感じたんだと思うんです。建築学会賞ができた時、第一回にはくは佐藤君のあれと、それから関野（克）君の奈良時代の住宅の復元と、それから浜田（稔）君の水セ

メント比と、その三つを選んで受賞候補にして、幸いそれが採用されて……。

村松 先生の卒業論文の音響的なものというのは、佐藤武夫さんが市政会館にやられたのはまたかなりあとになるわけですね。

内田 いやあまり変わらないですよ。

村松 違いませんでしたか。

内田 前の33番の教室というのが非常に音響的に具合が悪いので、真ん中のほうの部分が全然きこえないというものがあって、これはいつも何か大きな会があるたびに、それから合併教室をして使う場合にもきこえないという苦情が非常に多かったです。それでほかのことはどうでもいいけど、あんな音響の悪い内容を作ってもらっちゃ困ると、で悪くないようになってくれという話で、ほくも引受ける前にいろいろと調べてみたんです。その当時の外国の状況は、主としてアメリカですが、非常に金の掛かることだからアメリカではホールの改造を悪いとなると、これはどこが悪いからこういう悪い結果が出るのかということ調べて、そこを直すという方針でそれで音響の研究をやる。だからいろいろとこうやってみて結局第一的に考えなくちゃならないようになりパービレーションの時間だということになって、そしてそのリパービレーションの時間がこのホールはいくらだから、それは少し多すぎるから短くする必要があるとか、あるいは少し長くする必要があるとか、それにはどういう手段によって改造できるかというようなことを非常にやりまして、それにはほぼ自信を持つ、こういうような時代が丁度佐藤

君が日比谷公園のあれをやったのと同じような時期にあたったんですね。だからどうもやっぱり佐藤君のやったことのほうが一歩先で、その後ほくは不勉強であまり音響のこともやらないしするから現状はどうなのか。それから佐藤君も音響の効果というのよりはずつと離れちゃいましたから、だから現在はどうなのかそれは知りませんけどね。あの時は大したもんだと……。

村松 W・C・セービンなんかアメリカで劇場をこう改装したり、大学の講堂をやったり、セービンの理論なんかが入ってきて佐藤さんが煙の箱で反響があつたんですね。モデルとしてやり始めておられたですね。芝居がお好きというのは歌舞伎ですか。

内田 歌舞伎です。純粹の宮掖の。それはほくは一高の時分は試験中にノートを持って追込みへ歌舞伎を見に行ったことがあつたんです。だからその時分は、例えばもう九代目団十郎というのはほくら見ましたけども、少し時代がずれるけども、そうじゃなくてそのすぐあとに続いていた五代目菊五郎、それから吉右衛門だとか、それから歌右衛門だとか、ああいうのはめいめい同じものをやって、誰はこういうふうにやったからこつちの人はこういうふうになつた、というようなことまである程度見ながら説明できるようになつたけども、それをいつのころからかまったく見ないことになつちゃつて、現在ではまるで興味がなくなりましたね。そういう個人的の技術を知らない……。

——歌舞伎はやはり六代目菊五郎までではございませんか、東京歌舞伎も。現在いろんな名代の立派な俳優がおられるようですが、

本當の歌舞伎は六代目菊五郎ぐらゐまでじゃないですか。あるいはあと少しぐらいじゃないですか。私もそれを見ないからですが、先生と同じように。私も大学時代から歌舞伎にはずい分行ったものですが、新派も水谷八重子など娘時代から見たことがあるんですが、もう全然興味ないんです。それから関西歌舞伎も大阪の前の（中村）鴈次郎を非常にひいきにして見に行ったものですが、先生その歌舞伎を好きになったのはどういふご動機ですか。

内田 どういう動機ということもないんですが。

——一高時代に見にゆかれたのがきっかけでございますか。もつと前ですか。

内田 いやもつと前、中学時分にもやつぱり見ましたね。

村松 以上で第一回終了、今日は東大建築卒業まで、次回は三菱入社から。（了）

○第二回（昭和四十三年二月二十日）

村松 昭和四十三年二月二十日午後一時、内田先生のお話第二回。

内田 この中でむろん適当に取捨選択してということをお申し上げておつたんですが、あの中であなただが田中伴吉というほくに中学へゆけと勤めてくれた先生があるということをお話しましたね。あれがちよつと尻切れになつちやつてあれじゃ意味をなさなからそのあとへ、前にお話ししたことがあると思うが、自分もできれば君たちと一緒に中学の先生になり、高等学校の先生になり、できれ

ば大学の先生にもなるようにしたんだけど、そんなことはとても望み得ないことなんだが、ほくもこれから大いに勉強するつもりだと、そういうふうにいわれたんですよ。

でそれがぼくは中学に入つて中学の四年になったら、開成中学という中学ですが、その科学を受持つておられまして、中学の四年と、五年で科学を習つたんです。でその時はぼくは先生も少し遅れたけども中学の先生になられたなああとこう思つていたんですが、それでそういう話を相当年月が経つてから、年月といつたつて四年か、五年と思つたが、もう少し六、七年かな、そういう話を若い人になりましたら、田中伴吉という人はこういう顔の、顔に非常に特長のあの先生なんです。それでこういう顔の人じゃないかというから、そうだといつたら、それは一高で教授じゃないけども受験のある部分を担当しておられましたよという話で、これは高等学校といつたつて一高の、そういうようなことを例え助手でもくるのは大したものだと思つていたら、その当時、当時といつてもずい分古いことですが、物理学校（現東京理科大）がだんだん大きくなるうというわけで、改築をするのでその物理学校の校長であつたか、あるいは校長でなかつたかも知れないけど、ともかく物理学校の世話をやいていた先生が、中村恭平というんだつたか、これはうる覚えなんです、松下（清夫）君が多分知つていてと思いますから適当な機会に聞いてみようと思つんですが、中村恭平さんというのがおりました、その人が古い時代の例えば田中館愛橘さんなどを同じような時代の物理の出身でして、それで浜尾（新）先生、山川（健次郎）先生の総

長の場合の庶務課長をしていたんですよ。でぼくは営繕課を引受けていたものだからいろいろ接触がありましてよく知っていたんですよ。

でその縁故で今度は学校を拡張して増築をするんだが、それを面倒みてくれないかという話で、それではぼくは忙しくてとてもできないからというんで他の人を推薦して、そしてその下相談をしたいから、学校の幹部のものも集まるから是非列席してもらいたいということで行ったんですよ。そして何とその席に田中伴吉先生がおるんですよ。それではぼくは田中先生しばらくでした、先生のほうでもうご記憶ないでしょうが、ぼくはこういうものです。先生に習って、そして先生から中学にゆけといわれてきたんだが、その時に先生はできれば私も付いて中学、高等学校、大学の先生になってゆきたいというような、大したもんですねという話をしたもんです。その時はぼくは多分工学部長の時分であったかと思いますがね、まあ中村恭平さんも驚いてね。田中君そんなことがあったんですかといったら、私はやっぱり学費がないものだからアルバイトの意味で小学校の先生に行ったこともあるんですが、そういうことは記憶していません。で最後にどうもとんだところで旧悪を暴露されてはなはだ恐縮ですといったんですよ。旧悪どころのことじゃない、大したこっちゃありませんかといって、ぼくはそういつて別れたことがありませんが、それからじきにその先生亡くなりまして、それで何かにぼくはそのいまのことだけを物理学校に縁のある雑誌か何かに書いたことがありますよ。

村松 田中先生は当時物理学校の先生をしておられたんですか、先生がお会いになった時は。

内田 ええ幹部の職員だといって、職員で先生です。先生でいてその、でぼくはその時間けばよかったですね、聞かなかったんですが、多分その物理学校の古い出身じゃないかと思うんですが、あそこ出身者にはなかなか偉い人があつて……

村松 しかしなかなか大した方ですね。ご自分も向学心にあふれて。一種の美談ですね。

——独学でやられたんでしょうかね。

内田 そうなんでしょうね。

——珍しいご縁でございますね。先生とも。

内田 あなたが研究や何かやっている間に非常に気の乗った時と、そうでない波のようなものがある感じがせんかということ聞かれましたが、それに対してぼくはよく詳しく説明するために学校の成績のことなんぞを話したんですが、あれはやめていただいて、そしてただ相当波があつたように思うということと、それからその時期が高等学校のある時期、それから大学のある時期などに勉強に気が乗ったこともあつたと、そういうような意味のことだけにさせていただきます。

村松 わかりました。

内田 ぼくらの当時は七月が、あなた方の時分もやはりまだそうじゃなかったですか。

村松 私たちは戦後ですから三月二十八日が卒業式です。

——大正末期ぐらいからは、昭和からですかもう三月になっておりました。私たちは昭和初めですからもう三月です。

内田 あなたも三月ですか。高等学校から七月が区切りになっていて、だから中学が三月三十一日で終わりました、それから七月の中ごろだと思いが入学試験があつて、その間だけが準備時間で、そのほかにはもう準備期間というものは全然ありませんでしたからね。

村松 四ヶ月ほどブランクの期間があるわけですね。

内田 そうです。その間に各中学で補習科のようなものを設けて、何かきたいものはきてもいいというようなことで……

村松 現在では小学校、中学、高校、一日のすきもないわけですがね。七月にご卒業で三菱地所にお入りになられたわけですね。

内田 そうなんです。その前年の十二月であつたと思うんですが、ほくら佐野先生から三菱で君にきてほしいというんだがいいところだから行つたらどうかという、でほくはその当時できればもう少し勉強したいと思つてましたから、少し勉強したいと思つていゝんすといつて話して、ああそうかということであつたんですが、またしばらくして先方に話したら是非にといつて望まれるから行つたらどうかと、建築のことを勉強するといふのはやはり家を建てることをよく知つていゝんすことが非常に具合のいいことだから、勉強は勉強としてこの際に行つたらどうかと、そういうことでして、それじゃゆきましようということ、十二月に決まつたんです。もしたら丁度ここへきてからやつてもらおうと思ふ仕事が準備中だか

らその準備に加わつてもらいたいということ、それでもう十二月から事実には三菱へ行つたんだと思つていますがね。学校の差支えない時分に。

村松 卒業前にもう、いまでもやっていますね。

内田 それで七月十一日が卒業で、辞令をもらつたのはやつぱり三十一日まで学校があることになつていたのかな、八月一日の辞令をもらつたんです。三菱合資会社本社技士、これ三菱というのは変なところで、技士というのが技手の技で、士はさむらいという字を書いた。その当時の三菱のそのできた一番初めのことにはほくは自分で体験したことでもないし、あまり詳しくは知らないんですが、曾禰（達蔵）先生がともかく実際の仕事の親方で、コンドル先生が顧問ということで、三菱の建築のほうのスタッフができていたらいいんですね。その時分は丸ノ内三菱建築所という一つの独立機関でしてね、三菱の中の。ずつとやつてきていたんですが、ほくの行つたのが四十年であつて、四十年の春だか、あるいは三十九年だかに曾禰先生がお辞めになりました……

村松 設計事務所をお作りになつた。中條（精一郎）さんと。

内田 それでやつぱり顧問としては残つておられたようですね。それでその建築のほうの首脳者は保岡勝也という、あれは明治三十年……

村松 三十年くらいの方だと思ひましたね。

内田 非常な腕の立つといつて、デザインというようなほうよりは事務的な腕の立つ人であつたらしいですね。当時の人などの話の

中に、建築のほうで仕事師として関西の片岡、東京の保岡というふうにいわれるんだと、そういうことを聞いたことがあります。それで実際にほくら接触してみても非常に腕の立つ人でした。立つといってもデザインの方はそう大してあれだけでも、これもしかしそうまずくはなくて、いまは保岡さんの作品はこわれてなくなりませんが、ついこの間まであったんですが、相当デザインもやる人でしたが、特に仕事をする人であつたようです。それで三菱の建築というのが一番先にできましたのが三菱一号館とほくらいつてたのが、その後名前が変わっちゃつて……。

村松　いまは東九号館です。

内田　東九号館があれが明治二十七年に事実で上がった。でその当時はコンドルさんが顧問で、曾禰さんがその親方であつたんで、その当時の話を曾禰先生からいろいろお聞きしたものの一部に、明治二十七年の七月に東京に相当大きな地震があつた。その時に丁度家が竣工して足場を取らうというところで、足場を取るんでその竣工の検査に足場に上がつて、その足場の途中におつた時に丁度地震があつたんだと、そういわれれますからほくは「それは先生危なかつたですね、それでどうもなかつたんですか」といったら、「いやその危ないとか、何とかそういう問題じゃなくて、ともかく何という理由もなしに、これはこのレンガ造はつぶれるかも知れない、つぶれたらその一緒にそこへ飛込んで、そしてレンガの中へ入つて死んでしまおうと思つたと」、そういうことをいわれました。それはもうその時の直感でなぜそういう感じになつたのかということとはちつ

とも。それでそのすぐあとだつたかこれも有名な話でして、ほくら先輩に聞かされたんだが、辰野先生が日本銀行の監督を最初にやられた。その時に現場を見回りにゆくのには首をふところにしておられたというような話があるんですね。それでそれを誰かが何のためにそういうものを持っていたのかということを開こうとは思つていたらしいが、辰野先生というのは非常に恐くて、そんなことは聞けなかつたらしいんですね。それでみんなが非常に責任感が強いからそういうことになつたんだと……。

それと丁度同じような話、ただ言い回し方のせいか行動が違うけど、そういつてほくはそのことをあとからになって何か書いたこともあつたような気がしますがね雑誌に。曾禰先生のことを書いた時だつたか何かに。それでその首脳者を、あるスタッフの技術の首脳者を技士というのを書くん、そして保岡勝也さんはほくの入つた時には丸ノ内三菱建築所の技士であつたんです。そのほかには東大出の人ではほくより一年先輩の本野精吾という、これは非常にデザインの上手な人ですね。ほくら本野君のデザインにはいつも敬服していたんだが、非常に上手な人です。

それで三菱に入つてからの仕事は、正式に三菱の人間になる前は現場を見回りなさいと。それで現場というものは非常に見方によつて違うもので、初めはもう三十分もあればいまの三菱のやつていような現場は見てしまうものなんだが、それではいけないんで、三十分でも見れるようなところを一日掛かりで見れるようになれば正式に現場を見れるようになるんだから、そういうふうな心掛けで

現場を勉強してゆかないと、そういうのを保岡さんがそう言ってくれて、その時は何とも思わなかったけど、のちになってなるほどいいことを教わったと思っております。

それでその当時工事を始めようとしていた建物が二棟ありまして、この二棟ともこわれてしまったが、商業会議所（東京商業会議所、明治三二年、妻木頼黄設計）、それから二つ抜けているところがありまして、その一番先、もう東京都庁、当時の東京府庁兼市役所（明治二七年、妻木頼黄設計）かな、その前の道を大名小路というんですよ。その大名小路の角のところが郵船会社の建物（日本郵船ビルディング、大正二二年、曾禰中條建築事務所）があるんです。その郵船会社と商業会議所との間の二つのブロックに、市役所寄りのほうにあるのが十二号館で、それから商業会議所側のほうにあるのが十三号館。それでそのデザインは略設計というのよりはもつと進んでいて、本設計と略設計の間ぐらいのところで、デザインはすっかり決まっちゃって、これは恐らく保岡さんが主としてやったものだと思いますが、でほくより一年前に本野君が行っていたから、本野君も相当手伝ったものだと思いますが。でほくがゆきました時にはほくに担当せよといわれた十三号館というほうも十二号館と同じように百分の一はみんなできていて、ディテールはちよつと一部分書きかけてあったけども、完成してはいなかったんです。でその十二号館のほうは本野君が、十三号館のほうはほくが担当してそしてやれと、まあ学校出たばかりでそんなもの担当させられても困ると言ったんですけど、いくらでも相談に乗るからという話で、でその

十二号館、十三号館のできるまで、それから十二号館、十三号館の設計をするまでの間は曾禰先生がスタッフのチーフで、それでやっていたわけですけど…。

村松 丁度切替わったばかりのところだったんですね。

内田 そうです。保岡さんがチーフになってすぐでしてね。

村松 それで十三号館のほうを担当せよと言われたんですけど、担当というのはどういうことなんですか。

内田 それはやっぱりいろんな意味に解釈できますが、まあ保岡さんの気持ちではやってみた具合によって自分がいろいろ指図してゆこうと、一人でうまくできるんなら任せてやらしてもと、そんなふうな気持ちじゃなかったかと思いますがね。その二号館というのが（テープ替え）

二階建であつて、高さはやっぱり軒高が五十尺ほどのものなんです。それが、それから三号館というのがさつきお話しした新たに作ろうという十三号館の隣にあたる郵船会社の建物のためにできたものなんです。その当時は東京市役所のほうと相對して大名小路に沿って歩くんですが、これがほくはやっぱりコンドルさんと、曾禰さんとの名前になっているんだけど、これは曾禰先生のデザインだと思つてうんですね。一号館と、二号館と、それから三号館とでは非常に手法が違う。いまはもうないからちよつとわかりませんが、それから四号館、五号館というのがいまいました十二号、十三号の向かい側ですね。馬場先通りを隔てた向かい側にあります…。

村松 ついこの間までありましたね。一号館に並んで二棟ですね。

四号、五号…。

内田　でその四号館というほうが高田商会のためにできたもんなんです。それから五号館というほうがセル・フレーザーというアメリカの会社のためにできたもので、これは同時に工事に着して、同時にでき上がったものなのですが、その二つから保岡勝也さんのデザインだとほくは思うんです。これはまたいまお話しした郵船の建物とはやはり非常に違っています。曾禰先生が自分でやられたんじゃないくて、保岡さんにやらしてそれを指図してできたものというふうに思うんですがね。

村松　私たちは曾禰先生がコンドルさんから離れて、純粹に曾禰先生の設計が四号館、五号館と思っておりましたけど、むしろ保岡さん…。

内田　これは事實は確かに保岡さんだと思うんです、その手法からいってですね。聞けば曾禰先生だといわれただろうけども、そしてそれが四号、五号、それから六号、七号、八号、九号、十号、十一号という、これは中通りというのがあるんですが、大名小路と堀端道路との中間にある、大名小路よりは少し狭い道路ですが、それに沿ってやはり一号館が最初の布石であったものだから、一号館の付近のほうが先だったのが、それから今度は帝劇のほうの近くまでの中通りの建築がずっとできて、それをやっている間は本野君はほとんど関係はなかったんじゃないかと思いますが、だから保岡さんが一人でいくたりかの人を使つて、そしてやっていたわけです。それから十二号、十三号になるわけですが、だからその中通りの建築ま

でところが、四号、五号館から中通りの建築までのところが保岡さんの設計と、これは設計といつていいだろうと思えますね。保岡さんが自分で百分の一の図はむろんだし、ディテールなどもかなり直してやつたんですから。

村松　あのころに小寺（金治）さんという人の名前を聞きますけど、それは先生…。

内田　それは保岡さんの技師、小寺君からはさむらいという字の技士なんです、保岡さんのその次の人でした。これは出身は学校はどこも出てないんじゃないかと思いますがね。小寺、三浦（鍊三）、横山（善四郎か）、そういうような人が東大出でなしに主な仕事をしていた人たちです。で計算は主として横山という人がやつたんで、これは東京物理学校の出でして、建築のデザインはちつともやらなかったんですけども、計算、ストレングスのこと、それから上下水道、そういうことを主としてやっていました。まったく実地から叩き上げの人でしたが、なかなか素質のいい立派な人でした。そういう人たちにほくら実地の仕事を大分習いましたかね。

そうしていたところが、その前からそういう話はあつたんだろうけども、三菱銀行の大阪支店を作るということになりました、それが実行に進んできたんですね。それで石造の相当大きなものができるんだから、丁度いい機会でもあるからというんで、その保岡さんの外国ゆきの、洋行の話が出てきたんです。その当時の洋行というのは、技師（？）いうんでも一年より短いということはほとんどなかったんですね。保岡さんの時はどのくらいだったか、二年くらい

であったかと思うんですが、そういう期間で行って、そしてそのあとはさつきお話しした小寺君が一番首席になるわけです。だけどその十二号と十三号に関しては本野君とほくとで責任を持って、そして十二号は本野君、十三号は内田が責任を持ってやってくれと、そういうことで立っていかれたんですが、これが何月にいかれたかということははっきり…。

村松 先生が正式に入られてからあとですか。

内田 入ってからあとです。ほくの入った時はそういうようなことは全然話も何もなかったんです。そして保岡さんが行ってから三、四ヶ月の間本野君とほくとで一生懸命やって、それで実際の仕事に關係する経験のある人でなくちゃわからないようなもの、それから見積りとか、そういうようなことは小寺君が主宰して、そしてやっていたんです。そういうようにして三、四ヶ月経ったら突如として本野君が辞めるといい出したんです。それで本野君もずい分いろいろ考えたらしいし、あの人は本野一郎といいましたかフランス大使を、その人の弟なんです。そういうような關係で、ほくらが聞いたような時分には三菱の上層部でもそれは仕方がないということでした承していたような時期があったんです。なぜかというが一番大きな原因は、京都に高等工芸学校で建築学科があるんですが、そこで教授の欠員ができるんで、それでその教授にゆく人は外国の建築のことも十分よく了解している人でなくちゃ困るといって洋行さすというんです。

村松 それが条件になっているわけですね。

内田 帰ってくれば、二年でしたか、あるいは三年だったかわからんが、三年だったかも知れませんが当時のことだから。それが一つと、それと対等、あるいは場合によるとどっちが重い理由だったかよくわからないんですが、その当時に丁度本野清吾君の兄さんがパリに駐在している日本の大使でして、それでその本野一郎さんからこつちのことをいろいろ世話してやるし、それから学校もゆきたい学校へ入れるように骨を折ってやるし、丁度いい機会だからこの際は非こいと、そういうふうには勧誘された。その二つが非常に大きな理由で、それで三菱のほうではまあ内部の交渉はどうであったかはわからないけれども、非常に困るからせめて保岡技士が帰るまでおつてほしいというふうにいっただけだし、しかしそれじゃどうも時期が間に合わないからということどうとう辞めて行ってしまったわけですが、そうなるとほく一人になってしまつて、でもあできるだけ責任を持ってやってみようということにして引受ける。小寺さんの、横山さんのいろいろ頼んで、そしてそれから二年間ぐらい、だからほくは三菱へ入ってじきでしたね、そういうことになったのは。ずい分苦労もしたし、勉強もしました。普通の学校を出てすぐ事務所なり、会社へ入った人はとてもあんなことはできなかったらうと思うんですが…。

村松 その実際にご苦労されたお話を少し…。

内田 それはやっぱりほくの執達の衝になるから多少聞いていた方がいいと思うんですがね。

村松 それは伺つておいた方がいいと思います。私も。

内田 その当時の三菱建築のやり方というのは何と云いますか、徹底的な直営なんです。それもいま考えてみると請負い事業をやっている人が仕事を引受けてもあんな細かい直営はないですね。例えばまず第一に家を建てるには根切りから始めるわけですが、その前にやり方を作って、そしてそれで位置を決めて、それで根切りに掛かる。そのやり方を作るといっただけを一つの請負い、むしろ常備がやるといってもいいくらいですね。それで実際大工は常備の大工も相当ありました。でそれがやると、できると今度は穴を掘る、根切りをする。で根切りは根切りだけで請負いに掛けるんです。入札して、そして根切りができるにあそこはくいを打つんです。くいは深川の材木屋を呼んで、どういうくいを打つと云って入札して買います。それから今度くいを打つのは葦、土工にやはり入札して打たすと。それからこれになると非常に極端で、いまはあんなばかなことをどこでもやりませんだろうと思えますけど、くいを打ったくいの頭の切り揃えですね、それをまた一つの請負いにして大工にやらすんですよ。そしてできると今度はコンクリートをやる。むしろ砂利、砂セメントというのは別に買っています、そして土工にコンクリートを練って打つことをやらせる、まあそんなふうな調子でズーッと上まで行った。だからとても……。

——その事務手続きが大変ですね。

内田 大変なんです。その事務手続きのほうは小寺君のところまでやってくれるからいいんですけども、それを監督するということは並大抵のことじゃありません。そしてまるで仕事を知らないものが

行ったんですから、ぼくらその時分二四、五ですからね、だから土工などにかかわれたりね。よくやるでしょ、くいを打つ時に歌を作っているいろいろやる、そういうふうな中に悪口を織り込んで大きな声でやる。(笑) それだけでも実際に仕事を覚えるには非常にいい機会なんですから、これは何とかしてごまかされもしないし、また本当にむずかしいことはむやみに強制するようなことはしないで、うまくゆくようにしたいと思ひまして朝も非常に早く、ぼくはその当時は麻布の丁度生研のすぐそばの新竜土町十二番地というところに住んでいました……。

村松 竜土軒の裏あたりになるんですか、いまの。

内田 そうです。竜土軒とは筋向かいくらいに当たるんです。それでそこから朝早く起きて、青山一丁目は電車が走っていたんです。それで青山一丁目まで歩いて行って、青山一丁目から電車に乗って。毎朝歩いてゆく道に乃木さんの屋敷の前を通るんです。毎朝乃木さんに会ったんです。乃木さんという人は実際新聞などにもよく出ていたんだが、馬を朝早く、場合によるとまだ日が出ないうちに馬を引出して、そして乗るよりは馬を引張って歩いたり、それからある場合には乗ったりして、毎朝お目に掛かるものですからいつとはなしにおじぎをするようになりました、それで帰ってくるころはもう日が暮れて、大体職人がくる前に行つてどういふふうになつていのかを見ると、きょうやる仕事はどこでどういふふうにと。それから帰る時はもう職人がすっかりしまつて片付けしている時分か、片付けの済んだころになつて家へ帰ると、そういうよう

なことをやって、これはもう非常に勉強したもんなんです。

で丁度その当時築地に工手学校、いまの工学院大学です。あそこが建築のほうでは講義をするんでなしにいろいろあんなばいして、教務主事という名前で教務のことをすべて取扱っていたりしていた。先生は辰野先生、妻木（頼黄）先生、曾禰先生、片山（東熊）先生、そういう大家がみんな揃っていて、そして講義をする人は割合に若い人なんです、そのうち妻木先生のほうは会計を主として担当をしておられました、辰野先生は教務のほうをしておられた。それでその学校へくる人は非常にでんでんばらばらで、もともとそれを作ったのは最高責任者は東大で養成すると、それは技師だと、それでそれから技師を養成する必要があるということで、手島（精一）さんが蔵前の高等工業学校を作られて、そこから出た人が技手、それでその下に使われるものがなくちゃ困ると、技術を知っているもので、それがたんに工手学校を作ろうというんで、これは辰野先生なども創立者の一人なんですが、初代の東大の総長そういう偉い人を頼んできて、そして始めたものなんです。だからごく一番下の技術屋ですね。それを作るといのが主で、ずい分早くからできていましたかね。

村松 十九年か、二十年ごろでしたかね。手弁当で始められたんだというお話を先生から伺いましたけど…。

内田 だからつまり学校を出てちよつとそういう大先生方の目にとまるような人はみんな義務的に引張られて、それで講義を何年かさせられたもんなんですよ。くる生徒というのは実に千差万別でし

て、いまのような意味で一番正式にきたというのは高等小学校を卒業してそしてすぐ入る。それからそれとはまるで種類の違ったもので二十才前後から三十、四十才くらいまでいたが、腹掛けと印半で、昼間は仕事をして夜学校へ通うと、だから自然工手学校というのは夜学でしたがね。その時分勉強した人で、ずい分はくらがゆく前にやはり相当大勢の人がそこを出ていましてね。そして建築のほうでは土木のほうと違っていろいろな人がいるということと、ごく割合に低級な学力の人でも仕事ができるというような意味からですか、それからまたそういうところで非常に勉強するという人材もいたんですね。ずい分立派な人が工手学校を出ています。大倉組の重役だとか、清水組の重役、立派な人が出ています。それはやつぱり作った人が辰野さんとか、妻木さんとかそういうような偉い先生方がやつておられるからですね。だからまたその先生をおおせつかったんですよ。それが建築学科の家屋構造、それから機械科なんかでコンモンレクチャーがあるんですがね。それではレンガの工事、基礎の工事、そういうようなものが、四十二年の九月、だから四十年に学校を出てまもなくで、まあ何とかやらないこともないだろうというんで行ってみたら、驚いたことはいまのものもひき、腹掛けのような人は想像しなかったんですがね、そういうのがきていろいろな質問を持ってくるんですよ。（笑）

村松 実際のあれですね。

内田 そうです。まあ知らないことが多いんですね。しかし理屈で通せることはいろいろ理屈を言い、議論しながら、まあ本当の仕

事をやるのには向こうが堪能なんだからそういうことは教わりながらやり、そしてわからないことはじゃあ調べてきてこの次にまた研究しましょうというようなことで、それでいろんなことを持つて帰って、そしてそれを三菱の現場で働いている世話役のような人間、主としてそういう世話役を先生にしているんなことを聞いて、うっかりした答えをするとそれ突つ込まれますからね。だからいろいろ質問を受けて、そしてその答えを聞き、実際の状況も見て、そして工手学校へ行つてそしてその聞いてきたことで議論して、教える、教わるのはお互いっことで、そういうふうなんだからこつちで教えるところもあれば教わるところもあると、だからそういうふうな気持ちでやつてゆくんだからやつぱり朝暗いうちに家を出て、本当に暗くなりかかつて、あるいは暗くなつてから家へ帰るといふようなことをやつたんですが、そのほくの教えたことで一度辰野先生、辰野先生はさつきもお話したように先生は辞めておられたから習わないんですがね。

村松 三十六年にお辞めになつておられますからね。

内田 そうでしたね。ほくは三十七年に入つたから丁度一年。辰野先生に呼ばれて、君は工手学校でずい分実地的な講義をしているようだがそういうものを一体どこで習つたんだ。(笑) そういうふうに言われて、だからほくは実際に仕事をしている人からも習うし、実際には見て、そしていろいろんなことを研究して、それは結構なことで工手学校のような人を教えるのにはそういう心掛けがいいねといふようなことを多少お誉めにあづかつたこともあつたんです。それ

は辰野先生のところで給仕をしている人のある人が工手学校にいて、そして試験の時にノートを見ていた、それを辰野先生が見ていて、一体こんなことを教えているのは誰が教えているんだと聞かれた。(笑) そしてほくが教えているということがわかつたもんだからそういうことを…。

村松 しかし当時としたら帝国大学の学士様が(?)から話を聞かれるなんていうのはなかなか謙虚じゃないかと…。

内田 そうですね。でもやつぱりずい分負けん気だつたが、しかし実際の仕事というものは学問とちよつと違ふところもあるしするから、やつぱりそういう人から聞くのは当り前だといふような気持ちでした。むしろほくは、まあそういうことを言つては悪いけども、三菱におつた実地上がりのいろんな人ですね、そういう人がやつぱりある理論を持つていゝるんですよ。そういう人から教わるということとをあんまり気持ちがよくなくて、やつぱりこういうのは相当素養のある人間が自分で考へて、そしてこういうところはこうすべきもんだといふふうにしてゆくのが、だから少し慣れてきてからだつたが、石屋がやつぱり一番団結が強いんですね。ストライキなんていうのは石屋が本場ですよ。

村松 東宮御所(現迎賓館、明治四二年、片山東熊設計)の工事の時も何か騒動なんといふのが、有名なやつがありますね。やつぱりいずれにしても先生の…。

——本当に先生は実地のことは詳しくて、ほくは(?)にある時にずい分先生からおこごとを頂戴したんですけど、やつぱり先生

のそういう体験からですね。

村松 先生のビルコンがそこから始まったわけですね。

内田 そうです。それでほくは一番あれしたのは、やっぱり学問をやるについても工科の学問をやるには実地をよく知らなければ駄目だと、できないことを非常に無理してやらせたり、できることをできないと称してやらなかったりするようなことは非常にいけないだから、そういうことのないようにするにはやっぱり実際のことを知らなきゃ駄目だと、そういう観念を非常に強く持ちましたね。そして大学へ行ったりしたもんだから、いまでもほくはやっぱり大学の教授も、つまり工学的のことをやるのならやっぱりある程度打っちゃついても自分で一軒家を建てられるような、そういうような素質が必要だという感じを持っていますね。

——さっきの実際に叩き上げた人が理論を持っているのがあまり好まなかったというようなことを言われたと思うんですが、それはどういう意味ですか。

村松 結局現場の肝入りから話をむしろ聞かれて、地所の先輩たちというか、見積もりとかそういうことをやっておられる方からはあまり聞かれなかったという、そういうことでしょ。

内田 それは別な言葉で言いますと、そういう人たちが人に教えることは自分が習ったこと。習ったというのにもいろいろあるけども、口から教わったことで自分で体験してやったことではない場合がずい分あるんです。それでわれわれのものから聞かれると知らないということとは言わないで、場合によるとそれで本当にいいのかな、

どうかなのというような答弁をされるのがずい分あるんです。そして非常に重大なことはノートして終始ポケットに持っていて、それは教えないんですね、聞いても。だからそれよりは現場の実際に仕事をしているものに聞いたほうが、そしてそれなら勝手に自分の理論と合わせて行って、合うところは取るし、そうでないところは取らなくてもいいし、こんなことがありました。

石屋の仕事場へ行ってもし硫黄の臭いような匂いがしたらぼつかに欠陥がありはしないかということをよく調べる必要がある。これは石の角がよく欠けるんですよ、それをうまくやるためにそれをすたらつしゃつて大きな石をまた買ってきてやり直すのは大変ですからね。それをていねいに継げばそれでほくは十分いいと思うんです。それをちよつと目の見えるところが具合のいいようにこうことをするには、硫黄を溶いてそれで硫黄でもつてくつ付けると、そうするとすぐくつ付いて非常に体裁よくできるんですよ。しかしわずかな時日で、わずかな雨露にさらされることによってこわれるんです。だからほくはそういうのを見つけた場合には、継ぐのがいけない、石をすたらつしゃつて、そして新しい石を持ってきてやり直せというような無理なことは言わないで、お互いに相談して、そして多少体裁は悪いがこれなら相当期間持つというような工法でやればそれでいいとほくは思うんだ、だから何か故障が起きたら相談してくれないか、そうすれば両方に不都合のないように決めるから、ということをやったことがあります。

村松 そういう方針は先生當繕課へ入られてからの実際の建築の

指導を何か一貫しているような、そこらあたりのご経験がスタートになったわけですね。

内田 だけどもむしろいまの工手学校で教えたり、三菱の現場をやったりしたことでそういう信念が非常に強くなったんですね。それで建築の工事の監督というのはこういうふうにするべきものだという事を非常に感じたわけなんです。あとは大体あれしたんで、今度は三菱を辞める時のいきさつを少し…。

村松 大学へ戻られるところを…。

内田 大学における時分からやっぱり研究のほうもできれば多少やってみたいというような考えも持っていたんですが、鉄筋コンクリートというものはよくが大学を出た時分にはまだ日が浅いんですね。

村松 佐野先生とか、日比（忠彦）先生なんかは建築雑誌へちょっと、また非常に啓蒙的な段階でやられた時ですね。

内田 鉄筋コンクリートというのがいつ、どうして世の中へ出てきたのかということはかなりよくは調べてみましたけども、やっぱりごく的確にこれは動かすべからざることだということには行っていないんですね。現在はもうずいぶん分月日が経ったから相当わかっているかも知れないけども、あれはやっぱりほかのいろんなことと同じように、いつの博覧会でしたかね、パリの博覧会、百年は経っていないと思うんですけど、いまから考えて…。

村松 いまから丁度百年くらいです。一八六八年くらいのパリ博ですね。

内田 ランボーという人が船を作ったというんだが、どうも家もできないうちに船ができたというのも変だと思っんですけども、ともかくランボーの船のほうがモニエの博覧会の時の出品よりは早いというような説もあってどうもはっきりわからないんだが、まあ一般にモニエのことは言われているから、それを取ってもいまから百年です。そうするとその当時はまず六十年くらい、それからドイツでワイス・パウシンガーかそういう人たちが鉄筋コンクリートの理論を発表したのが十数年経ってからですからね。

村松 じゃあもう二十世紀になってからですかね。（？）なんかの理論ですね。

内田 それからそれをアメリカでもかく実行に移したのが、これはいまのワイスなどの理論のできないうちからやっているんですねアメリカでは。それだから工事中に三階建の家をひっくり返したり、何かしたわけなんだけど、非常に年月が若いから研究すべき点で研究されていないところが非常に多い。でこれは非常におもしろいことじゃないかということも大学時分から念頭にあつて、ことにこの前もお話ししたが菱田唯蔵君がどういふものをやるというようなことをいろいろ話をして、そしてやっぱり鉄筋コンクリートというのは力学的に考えても非常におもしろい。まあその時の議論だからいまから考えれば少しこっけいな感じのするところもあるわけだけども、いままでの力学というものはユニフォームな材料について理論を研究しているんで、それで鉄筋コンクリートというものは少なくとも二つの違った材料を組合わせて、そしてお互いにストレス

を分担し合つてやるというまったく新しいものなんだから、だからこのメカニクスを完成するということはなかなか生やさしいことではない。それはまた工科の人がそういうことをやるというのはあるいは少し違うかも知れんけども、実際に仕事をやるほうの側からそういう方面を見てゆかなくちゃいけない。非常におもしろいからぜひやれ、徹底的にやってみたらどうかというような意見でして、ほくもそういうようなことは同感であつたしするから、それで鉄筋コンクリートをやってみたいというような気持はあつたんです。

それで三菱におつた時分に、入つてすぐでしたが、さつき話ました中通りの建築というのが工事のでき上がり掛かっているような途中でして、まだ細かいところはできていないところも相当あつたんです。その中に中央亭という料理屋がありまして、それもいろいろる位置が変わりましたが、元はその中通りの一部にあつたんです。あそこはオフィスビルディングばかり建っているんで、中央亭のようなものが入るとショールームがほしいということで、ショー・ウインドーをぜひ作つてほしい。それで保岡さんが設計したものがあつて、そして大きなアーチですわねレンガ造だから、だからアーチでやるより仕方がない。でアーチだとこれだけのスパンの時にはこれだけの厚さのものが必要だとかいうような習慣があるからそれによつてやる。そのショー・ウインドーを作るつもりでもショー・ウインドーにはならないんですね。ただのレンガ造でやるから(？)の面積が一致しないんです。それをほくは見たもんですから、これはその鉄筋コンクリートでやればこういうことでなくもつと大きな

ものができははずだと、それも実際にやったことがないからはずだより仕方がない。それでそれを大胆に保岡さんに、ほくはあれはつまらないから鉄筋コンクリートでやることにしたらどうですかと言つたら、鉄筋コンクリートでやるといつたつてどうしてやるんだと、それを誰ができる人があるかというんで、いやそれはやつぱり新しいことだからそう十分な経験を持つている人はまだ日本には少ないかも知れないけども、しかしやればできますから、ほくも少しは勉強して本に書いてあるぐらいのことは勘定できますからと言つたんです。

そしたらまあそうかというようなことだつたんです。でも保岡さんがそれを真面目に考えてくれたとみえまして、一週間か、十日経つてから君が言つてたのをほくもできればいいからと思つて曾禰先生に相談してみたら、曾禰先生は絶対にいかんと言われた。まだ早いからもう少し様子を見てからそういうものはやるならいいだろうという言われるんで、ずい分勧めてみたけど先生どうしても承知して下さらない。まああれはあきらめたらどうかと、そういう話であつたんです。それでほくは曾禰先生のところへ押掛けて行つて、保岡さんからこういう話を聞いたがぜひやらして下さいと言つて頼んだんですが、曾禰先生はやつぱりなかなか承諾されなくて、それでもう少しどつさり方々でいろいろなもの経験が出てからやることにして、三菱の建築というのとはともかく絶対に安全を保障し得るものでなければならぬという方針になつていんだからということ、やつぱりほくも若い時分にはずい分大胆なものであつて、それ

でもぼくは粘ったもんですからね。(テープ替え)

もう一つのほうを使う。そういうことにしたらどうか。ただしそういう実験等に手間取って工期に間に合わんようでは困るから、そういう場合には前の案でやるのだという曾禰先生の話だった。それからさっそくデザインをしまして、試験をしてみたのですが、その試験の結果は曾禰先生は安全を第一にして実際のロードよりはずっと大きな三倍ぐらいのロードを掛けて、大丈夫だからということとどうとう使ってもらった。ただしいま言ったのは東京の三菱で話で、ぼくはあとから注意されて、君は鉄筋コンクリートを大分熱心なようだが、土木のほうの白石直治君がやはりそのほうのことを一生懸命やって、すでに相当立派なものを作っている。それは神戸の東京倉庫(現石川ビル、明治三八年、曾禰達蔵)の建築ですが、これを行って見てきたらどうか。こっちは神戸に鉄筋コンクリートの調査とかで出張するということにしてあげるから行ってみなさいということ、ぼくはそんなのがあるから見てきたいということ、いま見たらどうかは知りませんが…。

村松 数年前に私調査にゆきましたが、空襲でやられました二階建だったので一階建しか残っていません。もういまはどうですか。

内田 行ってみたら、ただのコンクリートでないのです。高橋元吉郎という土木の工学者で、その人が現場をやっています、白石先生には、ぼくはお目に掛からなかったが、高橋君がぼくに詳しく説明してくれたが、鉄筋コンクリート説で、鉄筋コンクリートなら

何でもできないものはない。およそストラクチャーなら何でもできる。ストラクチャーでないものでもできる。それで、それをぜひ見ていってくれと言っているので、それは屋根から建具まで、ドアも鉄筋コンクリートでつくっているのです。それは東京倉庫の建物ですが、全部でないかも知れませんが、ぼくが見せられたのは、鉄筋コンクリートでたしかにできている。それから床は無論の話、その時代にああいうことを思い切つてやるといのは、白石さんが偉かったのか、下で働いている高橋という人が、鉄筋コンクリートの崇拜者であつたので、ああいうことになつたのかも知れませんが、東京で調べたのですが、東京では永代橋のそばの福島橋という橋のそばに、渋沢倉庫、これは清水組の施工のようですので、あるいは佐野先生がやられたのかと思つたら、どうも佐野先生にお聞きしてみたところでは、先生自身ではないらしいのです。

村松 佐野先生が構造計算をチェックされたという…。

内田 そういうことですかね。その程度か知りませんが、それははっきりしたこともわからないので、そんなことは書かないほうがいいと思います。それでいつ日本で始めたかは、よくわからないのです。しかしぼくらが見たのでは、神戸の東京倉庫が、ともかく鉄筋コンクリートと立派に言えるようなもので、そしてわりあいに早い。

—それはおやめになる前ですから、四十二年ですね。

内田 三菱における時分ですが。

—その時は、できていたわけですか。

内田 できていたのです。工事もしていたのです。

——鉄筋コンクリートは、日本に三十何年にできたのじゃないのですか。

内田 明治の三十年のころと、わたしは講義などで聞いているのです。

村松 いろいろ試みがやられておりますね。土木の橋などは、田辺朔郎さんが琵琶湖疎水に掛けられている、小さな橋ですが…。

土木のほうが早かったですね。

村松 土木のほうが、わりあい大胆に、試みはしているようですね。建築はいろいろるさいですから、ことに三菱などは、現在でも安全第一主義ですからね。

内田 それで三菱では、いまの話では、十二号館、十三号館の廊下の床には、つまり廊下の床というのは、スパンのあまり大きくないないもの、そういうところには鉄筋コンクリートを使わしてくれまして。やはり実験の効果ですね。やはり少しでも広いところはいかん、ということ、だからスパンを短くすれば、幾つか数多くすれば、アーチでなくてもいいのじゃないかということ言ったが、しかし、やらしてくれるということで非常に満足だから、そうそれを主張しなかつたんですね。

村松 それが大学に戻られる、一番大きな原因ですね。

内田 そうです。鉄筋コンクリート、ぜひやりたいということ、それでこれは多くの性癖みたいなもので、一般の人にはまることでないが、人の世話になることはいやだという気持を、相当強烈に持

っていた。三菱はやめないでということ、非常に奨められました。ことに桐島（像一）さんなどからは、直接、つまり三菱ということころは、おおいに伸びるところだし、いろんなことをやっている。つまり、どうしても大学に入って勉強したいというならば、大学に、たとえば三年やるならば、三年間は三菱に来ないでもいい。そして俸給は、昇給はしないかも知れないが、相当なものを上げるから、それでいて、何も三菱で勉強したからといって、その権利をどうするとか、ということはない。君の体に付くようにやっていいのだから、ぜひやってくれ。でも、ぼくはお世話になるのを快くしないので、よそで自分勝手なことをして、三菱から給料をもらおうということとは快くないから、また勉強がある程度できたらの上での話にしてもらいたい。また最後に、佐野先生からいろいろ言ってこられて、佐野先生というのは、非常に熱がありました、じわじわと言って、ぼくもついに窮して、最後には、「私は先生、三菱にはいやなんですよ、やめるのです。そう考えてください」と言って、とうとう辞表を出したのですが、佐野先生は、しかし、ずいぶん失礼なことも言ったのですが、たえずいろいろ可愛がってください、いろいろ世話になりました。そうしてみると、あまり感じを悪くしているということではないと思います。それでとうとうやめて、そして大学に入ることにして、佐野先生にいろいろご相談をして…。

村松 大学に帰られたのが、何年になりますか。

内田 三菱をやめたのが、四十三年四月十三日です。その時に依頼解備という辞令をもらって…。

村松 四十三年六月十七日ですか、東京帝国大学、工科大学大学院入学。

内田 入学を許可されたのは、六月です。この時には、ぼくは明治四十年に出たが、四十三年の七月に内藤多仲君が卒業して、内藤君も勉強をするというので、ぼくのほうが三菱で二年半ほどやっていたので、ぼくが大学院入学が六月十七日だから、内藤君が二月か三月遅れたらうと思います。いまはなくなつたが、北側の自在画の部屋で、いまも自在画の部屋は北側にあるが、あれは向きが北側がいいからということなんだが、そこに内藤君と向かい合つて勉強することに、佐野先生の話で、ぼくは初めから鉄筋コンクリートで、それを先生によく言つていたし、先生ともよく相談していた関係で、それでぼくと内藤君とのつりあいなどのことについて、佐野先生は「鉄とコンクリートを原料とせる、建築構造について」、内藤君は、「鉄とコンクリートを原料とせる、建築構造について」、内藤君のは、「鉄を原料とせる、建築構造について」です。それでやつて、向かい合せて勉強したのは、半年足らずでした。それで内藤君は、早稲田ができて、人がいるというので、早稲田の教授になるようになって、自然本郷のほうには来なくなつたが、本郷からはすぐ洋行してしまつたかな。そこらははつきりしません、ともかく一緒に勉強したのは、期間が非常にわずかで、内藤君は早稲田にゆくと決まつて、ぼくは学校に留まつていたわけですが、それから……。

村松 大学院は、先生は結局何年おやりになつたわけですか。

内田 これからお話ししますが、ぼくは講師になりました、講師

になつて二月か三月して、大学院をやめたのです。これは佐野先生が帰つてこられて、佐野先生が向こうに三年いたですから。

村松 講師になられたのが、四十四年二月十五日ですね。だから、大学院に入つて一年もないわけですね。その間に佐野先生が洋行されて……。

内田 佐野先生が三年ですからね。佐野先生が洋行されるために、佐野先生がほとんど自分で創設されたと言つてもいい、「カリキュレーション・フォア・ビルディング・コンストラクション」という題です。ぼくらの時分は、こういう学科の表題は、まだ英語だったですね。佐野先生の担当されていた、「カリキュレーション・フォア・ビルディング・リンフォースドコンクリートコンストラクション」、これを佐野先生が担当して、そして、これらの二つをぼくにやれということ、ぼくは講師になつたのです。だから講師になつたのは、四十四年ですね。四十年に卒業して、四十四年だから、ずいぶん遅かつたわけだが、しかしあとから見れば、非常に早かつたとも言えるわけです。

村松 それから先生生活が始まるわけですね。

内田 その前に、所沢の飛行船格納庫、これは四十三年の六月ですが、佐野先生が外国にゆかれる直前です。当時陸軍にぼくらより二年先輩の、だから三十八年卒業の、田村鎮さんという人が、首席の技師でして、それが佐野先生のところへ尋ねてこられて、それでパーセバル飛行船、ずいぶんその当時はのんびりしたもので、飛行機、飛行船ができてくる。日本もやはりその研究もし、試乗もしな

ければならないというので、フランスからパーセル飛行船、これはその当時一番有名だったのは、ドイツのチュッペリンですが、チュッペリンというのは非常に細長いが、パーセルはもう少しふくらんだ短いものです。それを買うことにして、注文を陸軍でしたわけです。注文をしたが、もし来たらどこに置いたらいいかということ、それから研究してみると、どうもしまっておくには、雨ざらしで具合が悪い。家の中に入れなければならない。家の中に入れるということになると、たいへんなことで、場所はあつても、どういうふうにしてつくるかという説が出て、それをつくるについて、当時田中館先生が、飛行機、飛行船のことについての顧問のようになつていたので、それで田中館先生にいろいろ相談をして、それに田村君も加わつて、結局佐野先生に頼むより仕方がないということ、佐野先生のところに頼みに来たのです。ところが田村君は、佐野先生がすぐに外国にゆかれるということを知らなかつて頼みに来たわけですが、そしてこれは二年ということにほぼ決まっていたが、佐野先生は、二年じゃあ向こうの勉強はできない。少なくとも三年いて、向こうで講義も開き、実験にも携わつて、本式に勉強したいから、どうしても三年ということ、三年に決まつて、とてもこれから設計してつくるなんて間に合はん。それじゃあどうしよう、ということになったが、その当時は人がいませんので、ほくか、内藤君かにやるより仕方がないということであつたのだらうが、内藤君は早稲田にいるということで、どうもほくかやるより仕方がないので、ほくは田村君が佐野先生に頼みに来ている席に呼ばれまして、

「突然だけれども、こういう事情なんだから、ともかくできるだけのことをやってみたらどうか。」どうも非常に大きなもので、ことに田中館先生が、家の中にどうせそういうのをつくるならば、一部を風洞のように使つて、風圧に対する実験もしたいという、いろんな注文を出してくるのを、田村君から聞きまして、とてもほくは責任を負つて、そういうデザインをすることはできないから、佐野先生に少し向こうにゆくのを延ばして、せめてスケッチだけでもつくつていつてもらえないかと頼んだのですが、どうしてもそれがうまくゆきません、結局、それをどうも引受けざるをえなくなつたのです。それが四十三年の十月ですね。

村松 「所沢飛行場に新築すべき、大飛行船格納庫の設計、監督を依頼、近衛師団経理部、田村鎮陸軍技師。」そうすると、これは全部をやられたのですね。

内田 これはほくがすっかりやつたのです。これで一番面倒だとほくが感じた点は、三つあつたのですが、それがどんな規模のものかということがあつたのです。

村松 建築雑誌などにも報告があつたと思うのですが、建築雑誌の大正四年五月号に、「所沢飛行場、飛行船庫、及び同説明」というのがされているようです。

内田 詳しくはそれですが、要点は、明治四十三年に設計をして、四十四年に着工して、四十五年に竣工したのです。それで、当時は尺ですが、間口が一〇四尺、奥行きが四五〇尺六寸、中央部の間口が七四尺、奥行きが四一七尺、中央部の天井の高さが八二尺です。

この中央部というのは、建物の構造は、これはプリントにもありませんが、こういうものです。ここに、ここに、真中のところに、この中に入れたものの各部分が自由に観測できるような、相当ゆつたりした歩廊がほしいというのが、田中館さんの注文です。それからギヤラリーは、そばのほうはよく見えるためにということですが、これはこういうストラクチャーのものを、なるべく経済的に持たすために、こんなものがあるのだろうという、これは幾つもやったが、結論としてこんなものですが、これがこのところが自由に通るのですから、何もなしにこういうものでなければいけないわけだ。こういうふうには、このフレームをどうしたらデタミネートのものであるか。これが一つの苦労した点です。もう一つの大きな点は、こういう形を考えるにも、いろいろ苦労はあったけれども、こういうものをここに取付けるのに、どういうふうな方法で、どう付けたらいいだろうかということいろいろ考えて、当時こうなのは日本にはなかったのです。外国にはあるだろうと思って、いろいろ雑誌などひっくり返してみたが、詳しく見れば、あるいは出てきたのかも知れませんが、多くの搜した範囲内では、出てないのです。それで「ベトウンドアイゼン」か、あるいは「アイゼンパウ」だったか、ドイツの雑誌に、チェッペリンの飛行船の格納庫が、こんな小さな写真に写したのがあったのです。それが唯一の参考物であって、フレームもあとから調べたが、全然違いまして、どうもそれ一つより参考にならないので、仕様がないので、それでもう一つは、これをどういうふうにして組立てるかということです。それを下で組立てて、

吊り上げてここに持つてきて、ここではめて、両方のブラケットを先につくっておきまして、そういうふうにしたのですが、これは、持上げるのは橋を建設するような方法で、これが動くたびにストレスの変わり方が変わってきますので、それを克明にやればできるのだ。困ったのは、これにはめると、開くことに間違いはないが、ホリゾンタルスラストでどれだけ開くかということを決めてやらねばいけないので、これはまた、非常な悩みでした。結論としては、いろんな数式を使つて勘定もしたが、このスパンが二寸開くというのは結論で、だから、このアーチのこのスパンが、こっちのブラケットの間のスパンより、二寸短くつくっておきまして、ここに入れてぐっと開いた時に、ちょうどバチカルになるように、という考えです。この当時は電話なども不自由だったから、所沢でこの工事をして、ぼくは東京にいる。そしてこの現場をやる人は、村山万吉という人でしたが、その人に頼んで、電報で結果だの、質問が来たりすることがありました。それともう一つ、これはぼくが関係しないことですが、この、前の扉の開閉装置をどうしたらいいか。ともかく百尺角のような大きな扉だから、それをどうしたらいいかというところで、これはぜひぶん考えましたが、結局扉がこうありますと、これを何枚かに、たしか八枚くらいに分けて、これをだんだん引き込んでゆくようなふうにしたわけです。その引き込む装置は、機械のほうの出身で、陸軍から別な人に頼んだ。しかし扉はぼくのほうでやらなければならぬので、扉が風圧に耐えるために、えらい重いものになつて、それではしょうがないから、どういうふうにつ

くつたらいいだろうかということ、結局、こういう扉がありますと、その扉の両側に、屋根のトラスのようなものをつくって、このトラスのサポートは、下のほうは地面のところ、上のほうはこのところ、相当深い、厚いフレームをまたつくって、これによって両端の柱に伝える。そういう方法でやったのです。つまり、扉から前に出っ張っているようなものです。こんな扉をつくったのは、初めてでしょうね。いまじゃあ、そういうトラスに扉を使うのは、何でもなくなっています。

村松 最近では、巻上げのシャッターになっております。当時は模型設計はないのですね。

内田 やりませんでしたね。

村松 計算だけですね。きょうは大学院時代のお話しですね。

内田 ぼくは講師になったのは、四十四年の二月です。学校で多くの講義を聞いた人を調べてみると、四十三年七月に入学した人です。ぼくが講師になる半年前に入学した人たちが、四十四年二月に二年になっているわけです。四十三年七月に入学された方々が、初めて多くの講義を聞かれたわけです。これが四十三年七月ということ……。

村松 卒業が何年になりますか。四十三年だから、大正二年になりますか。戸田利兵衛、堀越三郎、佐藤四郎、中安直治、なくなつた方では、鈴木憲太郎さん、藤井厚二さん、松田亥作さん、そういう方ですね。

——講義題目は何でしたか。先ほどのカリキュレーションでしたね。

内田 つまり、建築構造計算と、鉄骨構造計算、鉄筋コンクリート構造、鉄筋コンクリートのことに關しては、またあとで……。これはぼくも相当調べたが、あんたもそういうことは調べておられるのだね。藤井さん、柴田さん、佐野さん、そういうことでやったのは、この三人。それからほかの講義の中に一緒に入れてやるのは、佐野先生も最初はそうだったが、これは土木の広井先生が軍事講義の中に、鉄筋コンクリートを入れてやっておられるのです。それで年代順でゆけば、広井先生、柴田先生、日比さん、佐野さんと並んでいたが、講義を始められたのは、広井先生が一番最初のブリッジコンストラクションの中でやられたが、柴田さんと、日比さんは、大学で講義をやられたのは、わりあい遅いのです。柴田さんは特に遅いのです。ぼくが大学院に入つて、柴田先生が洋行して帰ってきて、鉄筋コンクリートの講義をはじめられたわけです。その第一回の講義を聞いたのです。日比さんもあまり早くないのです。むしろ佐野先生が講義として始めたのは、一番古いのじゃないのですか。

村松 鉄骨については、横河（民輔）先生が講師で来られたという話ですが、体系立った講義は、むしろ先生の時からということになりますか。

内田 鉄筋コンクリートの最初の講義をしたのは誰かということ、なかなか重要ですが、ぼくがいままで調べたところでは、佐野先生も広井先生の講義を聞いたのじゃあないかと思えますがね。そういうことでなくて、学生に教室で教えたのは、ぼくの調べた中で、佐野先生が、多少の違いだけでも、一番古いのじゃないかとい

う気がするのです。柴田さんは、ほくは講義を聞いたので、いつと
いうことははっきりわかりますが、日比さんのは、京都大学にゆか
れて、すぐ鉄筋コンクリートの講義をされたか、鉄骨はやられたの
は確かですが、建築雑誌に出ているのも、鉄骨のが出ていますね。
鉄筋コンクリートのほうは出ていないから、ともかく広井先生は、

大学で講義をされたのは、三十何年でしょうね。柴田さんは四十年
よりあとですし、日比さんも四十年よりあとだと思うのです。そう
すると、佐野先生が講義をされたのが初めてじゃないか。ほくが最
初に聞いたのが、二年の時だから、三十八年です。いくらもそこに
違いはないのです。作品としては、柴田さんが京都の四条大橋だっ
たか、田辺朔郎さんは鉄骨ですかね。

村松 琵琶湖ですね。鉄筋コンクリートです。

内田 それじゃあ、非常に古いですね。

村松 実験的なスパンが五、六メートルですか。一枚ののっぺら
ぼうな板の橋ですが。

内田 疎水は田辺さんの案ですね。あれを実行に移すまでに、相
当苦労されて、方々にいろいろ宣伝もされたり、ともかく琵琶湖の
水を移すという、たいへんなことで…。

村松 鉄筋コンクリートですが、先生は大学院で勉強された時な
どは、どういう本をお使いになったのですか。外国の本ですか。

内田 ドイツで理論を発表されたワイスとか、パウシンガーとい
う人たちの、鉄筋コンクリートというのではなしに、メカニック
スのようなことの中に入っているのです。大学では理科の教室が、

鉄筋コンクリートの柴田さんの設計です。だけどあの時は、柴田さ
んはまだ講義はしていないのです。それと京都四条大橋を柴田さん
が鉄筋コンクリートでやっているのです。橋は建築よりは、ある意
味においてはむずかしいし、ある意味では建築がむずかしいとい
うことがあるのです。

——コンクリートとしては、橋のほうが早かったのですね。

内田 そうでしょうね。柴田さんも、広井さんも、担当はブリッ
ジコンストラクションというのですからね。柴田さんは向こうから
帰ってきてから、「アツプライドメカニクス」という題で講義をさ
れたのです。

村松 それで結局、震災予防調査会の鉄筋腐食の実験などに取掛
かられるわけですね、大正になってから。

内田 あれは佐野先生が始めたのです。佐野先生が始めて、それ
を一年くらいで、あとはほくが引継いだわけで、佐野先生は非常に
忙しかったと見えて、その実験用のコンクリートが普通のとは違っ
て、非常に粗雑なコンクリートで、だから成績が悪くて、結局ほく
が担当するようになってから、佐野先生にご相談をして、それをつ
くり直したのです。そのつくり直したのが、いまでも一部残ってお
ります。それはずっと前、浜田君に引継いでやってもらっています。

(了)

(校訂者・中野 実、藤井恵介、角田真弓)